
薔薇獄少女

亜麻音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

薔薇獄少女

【Nコード】

N4957X

【作者名】

亜麻音

【あらすじ】

突如歌舞伎町に現れた
つれざわしんら おくひらすいう おくひらそうる
連沢新羅奥平翠羽奥平蒼琉とある事件をきっかけに、万事屋メンバーは彼女等が真選組に所属していると知る。

だが彼女等は…。

“プロフィール”（前書き）

オリキャラ達の特徴など本文中に書こうとしたんですが別に作りましたー！

“プロフィール”

くプロフィールく

（オリキャラ）

―連沢 新羅―

（つれざわしんら）

身長…162，7？

年齢…17歳

特徴…肩より約6？ほど伸ばしたグレー色のストレートヘア。目の色は黒とごく普通。

真選組隊長服を着用しているが、ズボンではなく、太もものちよい上までの黒いスカートに黒のピンヒールブーツ。

腰には刀剣が刺さっている

―奥平翠羽―

（おくひらすいう）

身長…160．8？

年齢…15歳

特徴…髪は

腰まで伸ばした

茶色のクルクルツインテール。右目が碧色。左目が赤のオッドアイ。

新羅と同じ服装。

腰には刀剣が刺さっている

―奥平蒼琉―

（おくひらそうる）

身長…159，8？

年齢…15歳

特徴…青色のショートヘアで右目が赤色。左目が碧色のオッドアイ。

浴衣を少し改造し動きやすいように工夫している。

黒いピンヒールブーツ

クナイをいくつか持ち歩いている。

浴衣の色は、青と濃い紫を掛け合わせたもの―。

翠羽の双子の妹。

真選組とは全くの無関係。

“プロフィール”（後書き）

だいたいイメージは湧きましたでしょうか？

それでは、プロローグへどうぞ！

“プロローグ”

―外は、とてもどんよりとした天気

―灰色の雲は、

手を伸ばせば触れられそうなくらいの厚い雲―

ハッ……ハッ…

なんで……？

こんな……。

どう……して―？

―ある“者”は血に染められた屍…屍屍屍…

屍の海の真ん中で佇む―

辺りを見回しても、何処を見ても、屍の海は続く…。

何が…あつたの…？

皆…
どうし…て動か…ないの？

ガクツと膝から崩れ落ち
これは夢じゃないの？と
頭を抱える―

―誰が…
こ…んなことを

酷す…ぎる―

どうし…て 私だけが…残ってるの？

殺……し…たい。

色々な喜怒哀楽の感情が頭のなかを廻る―

……えっ

あれ…？

なんで喜・楽？

私、なんで喜んでるの？
なんで楽しんでるの？

こんなに…憎くて憎くて
今すぐ殺したいくらい…
憎いはず…なのに…？

自分の…中で、この状況をこの現実（今）を
愉しんでい…る自分が居るかのよう―

あっ…そっかこういうのを

“ 狂ってる ” って
いうのか―

そっか
私狂ってるんだ―

次第に口はどんどん横に
開いていき…
ついにはハハハ…ハハ…と笑いだす―

するとさっきまで
いなかったはずの前方に人影が見えた。
屍を我が物顔で踏み付けながらこちらに近づいて来るのが見える―

そこには…
女が一人…

そして
異様なほどの笑顔を向ける

アナタハ…

ワタシ…と同じ…。

同…じ…？

ケイヤク…シマシヨウ…ワタシト…

契約―？

ソウ ソウスレバ

アナタハ…。

女ってたまに何考えてるか分からなくなる(前書き)

グダグダのガダッガダ小説になるかと思いますが
どうぞ

お手柔らかに

お願いします

では

オープンっ！(^^)！

女ってたまに何考えてるか分からなくなる

*

―時は秋――

夏の暑中が終わり、
少し肌寒くなってきた頃合い―多くの人々が季節の
変わり目を感じ衣更えの支度をしている―。

紅葉で色鮮やかに染まる
木々達を、よそに
今日も歌舞伎町は、
人・天人で溢れ返っている

―いつもと変わらぬ平凡な生活が一変するなんて
誰も予想つかないまま―

「あー疲れるぜ…なんで初っ端から定春の散歩? ? てか何このシチュエーション!!」

主人公としてありえねーだろっ! 普通、主人公といえば海賊船に乗って「海賊王に俺はなるっ!!」とか、

「真実はいつも一おっ!!」とか「かーめーはーめ…」

「は」なんて言わせねえーよ!!」

てかなんで他のアニメの名台詞言ってるんだよっ!!」

見た目はぱっとしないがツツコミが取り柄の新八。外が寒いせいか口からは

白い息が出ている

「そうネっ! こんなアニメ出方考えるほうが負けネ。他のアニメの台詞言うほどこのアニメは甘くないアル

「まだまだだネ」。

「お前も他のアニメ引っ張ってきてんじゃねえーかよっ!」

そんな会話を聞きながら、のんきにあくびをする定春はこのこ歩いている。

すると――

「ワンワンワンっ！ワン！」

「！」なんだ定春、
イイメス犬でも見つけたのかっ！」

定春の鳴く方向に銀時は目を向ける……
「……………」？

……………？って！！え……………」

「つま……………さか」

二度見する銀時。

「どっとうしたんですか！銀さんっ！」
「天パっ！何かあったアルか！」

銀時の額に汗が垂れる――

「あれ…はまっま…さかの

今日っ…て…

ジャンプの発売日じゃねえかよおおー！」

「そっちかよっ！！」

新八と神楽はがくつとずっこける。

「いきなりシリアスモード突入！かと思ったらそういうことかよ。何紛らわしい行動とってんだよ！

てか良くこっからジャンプの表紙みえるよなっ！！此処から約25？はあるぞ！！それと定春急に止まん。お前が止まると後ろの人に迷惑かんだよ！」

振り返ると、約15人弱の人等が冷ややかな目でこちらを見ている

とりあえず頭を何度も下げて謝り、道を譲った―

あっ！言い忘れてた！新八がツツコミを言い終えるとゼーハアゼーハアと

息をあげた―にしても

よく一つも噛まないでツツこめる。それはツツコミと眼鏡の長い付き合いのせいかな。(作者あああっ?)

「新八いー!! お前は眼鏡!! 新八だがやれば出来る奴だと思ってたぞー! だからおめえーらは、定春の散歩を続けてろー!!」 「それ褒めてんのか

けなされてんのかわかんねえんだけど! って何自分だけ楽しようとしてえんだよ僕だってお通ちゃんのNEWシングルの買い!」 「駄眼鏡少し黙るヨロシ! いつまでも乳臭いコト語っ点じゃねーヨ。

だからお前はいつまでたっても新八なんだよ! なんだよ「八」って! 私「八」より「一」派ネ」

「神楽ちゃん: さっきから言ってるけど他のアニメ引っ張り出すの辞めにしよ。てか僕が新一kに適うとも思ってるの?」 「思う訳ねえーだろ! ぶっ殺すぞ!」

「神楽ちゃん: 毒舌」

「まっあんな甘党ヤロー」

ほっといてさっさと帰るあるヨ。あっ帰ったら「渡る世間は鬼しかいねえコノヤロー」見なくちゃいけない!」 アル! 定春早く帰ろう! 「わんっ!」

すると神楽は定春にちょこんと乗リスタスタと行ってしまった。

「: 駄目だ。さっきから色んなテレビのタイトルやなんやかんや出し過ぎてる...」

泉ピ○子Sすみません...」

新八はこちらに向かって深く頭を下げた。

「さて僕も行こう……………」

……

…

あれ？」

前進した身体を数歩後ろに戻す―

新八は少し疑問を抱く。

「銀さんの入ったコンビニ毎日毎日客が多いのに今日はやけに人いないな…てか人ほぼぜ…」

「新八…！間違った駄眼鏡ー！！早くするアルヨ！」
ブンブン手を振る神楽―

「……………」

「僕の名前は新八じゃわー！！！！」―新八は大声でそう発しながら神楽達の元へ走っていく。新八の声は雲一つのない晴天の空に余韻を残し
そのまま静かに消えていった―

――――

新八が疑問を抱いてたなか銀時は満面の微笑みでコンビニの中にはいる―。

「ジャンプージャンプと…………いい年こいてジャンプなんて…とか言ってる奴

あいつらぜってえジャンプの良さわかつちやいねえー「少年ジャンプ」とか言っちゃってるけど実際少年以上におじさん向けもあるからね。特に「T O L O V Eる」とか

あれ何歳でも読んでも平気なやつだよ。9だの13だの年齢制限やってるから餓鬼がイっちゃってる世界に、Let's perlyしたくなるんだよ。あんなのFULL OPENにしときゃ餓鬼が卑猥なコト考えずに平和に暮らしていけんだよ。まっ銀さんは外見がおっさんでも心が少年だから少年！ジャンプ読んでも

大丈夫だけどねー！」

と独り言を言いながら雑誌等に目もくれずジャンプ、SQ、マガジンなどと

ずらっと並んでる前にびしっと立つ。

「ジャンプの今日の表紙はトリコ…か。悪くねえ」
ジャンプに手を伸ばす――

――カチャっ…

何かが頭の後ろに突き付けられる。

女ってたまに何考えてるか分からなくなる(後書き)

新) ????

神) なんだよぱっつあん
何キレてるアルか?

銀) お妙にまた
ダークマター

食べさせられたんだとさ
その副作用で作者に
八つ当たりしようとしている最中らしいぜ!!

新) 変な言い掛かりは
やめろよ!!

「花より団子」とか、それ結局自分が食べたいからじゃなくて？（前書き）

今回のサブタイと本文全然関係ありません。

「花より団子」とか、それ結局自分が食べたいからじゃなくて？

「おーおー多串くんか。」

何君もジャンプ買いにきたの？

あっ！君はマガジン派だったか。駄目だなあ君はまだまだアマチュアだ。てかマヨラーっていう存在だけでもうアマチュアだよ。

いやアマチュア以下だよねもうヘタレヤローだよね！つか鬼の副長と恐れられてる人がマヨラー！？

まるで、夜にラーメンを食べる人略してマヨラーの間違いじゃなくて？

片手にジャンプを持ち、手の空いてるもう片方の手で耳をほじくりながら振り返る。

「俺はジャンプでもマガジン派でもないー。」

「盗み屋派だ…！」

そこには銀時に拳銃を向ける男が二人いたー「えっ…」尋常じゃない汗がダラダラと頬をつたうー辺りを見ると、コンビニの店員4人、高校生くらいの女子3人、スーツ姿の男2人、お婆さん1人、に黒づくめの男たちが拳銃を突き付け座らせているーそれに

タバコを加えグラサンを

かけたおじさん―

金のなさそうなそのおじさんはホームレス生活でもしていそうないやしているひとがそこにはいた―

見た目どおりまるで駄目なおっさん……略してマダ……ってただの長谷川さんじゃねえかよっ！！

な―にやってんだあの

おっさん！！てか何ラフにパンツ一丁で拳銃突き付けられてんだよ。何顔赤らしめてんの！

Mだよあの人Mだよ―

声に出したいが、この状況で言うわけにもいかず

心の奥深くでツッコむ

ツッコむツッコむ！！

「おい何してる―さっさとそこに座れ」

銃を突き付けられながら人質が集う場所に座らせられる―皆とてもビクビク怯えている―隣のパン一のヤローを抜いてわ…。

（ツチなんだってんだよ！なんでこんな展開っ！初っ端から定春の散歩させられるわ

変な黒づくめのやつらに銃向けられてフラグは立つわ主人公としてかっこいいところ何もみせてねえ―じゃねえかよ！）

：

「あっ銀さんじゃん。こんなところで何してんの？」

「何してんのってどう考えても銃突き付けられて今にも頭ぶち抜かれそうな感じだろ見てわかんねえーのかバッキヤロー！
てか長谷川さん何その格好？なんでパンー？

黒づくめの男たちに聞かれないように

コソコソ話で長谷川さんに問うー

「いやぁーネクロゴンド

からここまで帰ってくるのに7日かかったんだけど

パンツびしょ濡れでさぁ…それに帰ってくる途中鯨の大群に襲われてパンツ破かれちゃったしコンビニで飯のやつ買おうと思ってここ寄ったんだけど結果こういうハメになっちゃったんだぁ」

「あーだからパンツそんなに破けてんだね。まあもう半分フルチン状態だけどさ…。軀喰われなかった分

有り難く思ったほうが良いよ。

ホントホント」

見ると色がハゲたトランクス＋半分モザイク状態の下半身がそこにはいた

「まあな後、ネクロゴンドに行ってきたお土産

「まる子も大好きになる

お菓子」略してマダオあるんだけど…食べる？」

「結局お菓子の名前もマダオなんかいっ」

「味覚絶品！ネクロゴンドマミューダパオ味だけど…」

「味の問題じゃねえーんだよ！！良く見てみるこの状況！！こんな状態で呑気に食う暇あるなら今頃この重苦しい牢獄コンビニから抜け出してるわ？

てかんな得体の知れない

食い物食えるわけねえだろう！」

「おいそこ静かにしろっ！殺されたいのか」

―カチャツカチャ

銀時と長谷川さんに向けて黒づくめの男達が一斉に銃を向ける―

「ちよっ：ちよっと

待って下さいよ先輩方―俺達撃っても何も得することないですって？あっ！でも

隣の人（長谷川さんに）に

撃ったら

ホームレスになった時の

生き方の知恵など得ること出来ますよ☆〃

「ちよっ銀さんっ！！何俺を盾にさせようとしてんの！：そんなだつたらこっちの銀髪の人撃ったほうが得ですよ！撃った瞬間、コイン出て来たり、アイスフラワーやファイアーフラワーとか出て来て技使えたり、スター出て来たら、スーパースイヤジンよりも無敵になれますよ★〃

「おいおい長谷川さーん！あんた何言っちゃってんの撃たれてコイン出て来るなんて聞いたことないんですけど！何パッケンフラワーに喰われて財布？だけじゃなく頭の中のコインまで空っぽになっちゃった？」「そういう銀さんこそ何その頭！塩でも振り掛けたの？だからそんなに白いの？

あっ！もしかして

アイスフラワーに凍結されちゃったの？成る程！

どうりで人よりも遥かに

煌めいてると思ったよ！

俺、マジ髪に神がいるかと思ったよ！！

「何ソレダジャレ！寒いよ寒いよ！あんたは、死ぬまで末永く「ダンボールの神様」でも聞いてろ！」

「クッパに炎吹かれて

髪チリチリ＋タマ無くなっちまえ」「……？

タマ無くなれってどういうことだああ！！俺は、死んでもタマとタマで闘わせられたり、ボックスドライバーに変えられたりするの
はもう御免だああー」

アニメ・原作などを見てた人なら分かると思うが、銀時の股間はリアルワールドではあまり使いどころはない。だが股間をいじるギャグを何度も生み出すことで笑いの神様を拝むコトが出来た！そう…この銀魂（世界）は“股間”というキーワードで成り立ってい…

「るわけねえーだろ！」そんなこ汚ねえ汚物なんぞでこの世界が成り立ってるわけねえーだろ！！

確かにこのアニメは普通のアニメとは違い、餓鬼には聞かれちゃまずい台詞も多々発している。視聴者からの苦情の電話で何度打ち切りの危機にあったか記憶に残らねえほど山ほどあった。だが一人でも多くこのアニメを見ていただけるよう汗水垂らして頑張ってきた俺達の苦勞！そんな汚物ごときにとられてたまる…

亜麻音

「はいはい終了終了ー！！金玉か銀魂かう〇こか

〇〇〇か知らないけど早く先進めてくれませんか？前の前書きで「オリキャラ出て来ます！」って

宣言しちゃったのに、こんなコンビニの中で

眠気が覚めるように覚めないようなゆるい話が終わらないといくつまでたっても先進まないんですけど！さっさとピリオド打っちゃってくださいよ！」

「ちょっと作者ーあんだ何してくれてんの！俺今良いこと言ってたよね？最後シメようとしてたよね？俺やっとな主人公としてカッコイイとこ見せられるふ陰気…てかそういう空気だったよね？」

「私…空気読めない女なんで！」

「何“きまった”みたいな感じになってんの！何も決まってないからね！そういうやつクラスに一人か二人いるよね！俺ああいう子苦手なんだよねとか周りから言われてる系だよね」

亜麻音

「まあともかくそういう訳だから…。んじゃ後よろしく！あっ！あっと一応忠告しとくけど、くれぐれも撃たれないように♪んじゃまたねー☆」

すると作者は光の速さで飛んでいき、キラッと星が一つ光ると、何も見えなくなったー

「あー？何なんだよたくっ！あっ！

長谷川さんいたんだ」

「なんで！今までずっと

話してたじゃん！

なんで急に存在消されてんの！」

「冗談だよ冗談！

あっ！先輩方すみません…大変長くお待たせいたしましたし…」

―バァン！

――外は晴天…。

中は曇天の状況のなか―

曇天の空は雲一つ晴れることもなく激しい雷雨が降り続いていた。
そこに集う者に予想したくもなかった最悪の光景を見せながら―

「花より団子」とか、それ結局自分が食べたいからじゃなくて？（後書き）

作者がキラッと光りって所は、ロケット団の奴でも思い浮かべて下さい。

後最後の曇天ってところはコンビニの中のことです。

てかコンビニの中で雨ふらねえし…とか思ってる人はそこはスルーでお願いします。

知らない人に自分の名前を呼ばれても一応100%スマイルで振り向け（前書き

今回は銀さん達はできません…

知らない人に自分の名前を呼ばれても一応100%スマイルで振り向け

「まあだいたいこういう帰ってこない日はパチンコ

行ってる日が多いけど、定春の散歩の途中だったから財布持ってたないと思うんだよね。あったとしてもジャンプ代くらいしか持ってたてない思うんだけど…」

「だったらコンビニ強盗にでも捕まってるんじゃないアルか。それかももうコンビニの中で銃で撃たれて死体となっているか。」

小指を鼻の穴にいれほじくりながらそんな冗談のよいで冗談じゃないコトを言う

なぜなら今さっきコンビニの中で一つの銃声の音が鳴り響いたからだ―。

「ハハハっ冗談も対外にしてよ。神楽ちゃん」―いやだから冗談じゃないって！

もしかしたら、みんなの銀さんマジガチで屍になってるかもしれないよ！主人公ご愁傷様ってなっちゃってるかもよ！

「そういえば！この時間帯って「渡る世間は鬼しかいねえ」の再放送やってるアル。駄眼鏡リモコン取るアル！」

「だからその駄眼鏡ってやめてくんない？」
「いいからさっさと」

リモコンよこせよ。私よりろくにグッズ出てないくせに…。」

「んなっ!! それ気にしてたのに…! てか今関係なくね?」そう言いつつ自分の隣にあったリモコンを神楽に手渡す。神楽はリモコンの電源を入れると「渡るゝ渡るゝ」と意味のわからない歌を唄いながら、チャンネルを回す―

「おーちょうど

ぴったしネ♪」

―オープニング―

ゝてれれれれれれん

てれん てれれれれれ… てれ… 「ニュースEDOゝ

先程こちらに入ってきた情報をお伝えします…。中継が繋がっているようです。

「なんだよっ! オープニング聞けないじゃないかアル」

…では現場にいる

結野アナ! 結野アナ!

…:はい現場の結野です。先程こちらのコンビニで

強盗事件が起きました。そのあとたまたまこの

コンビニに居合わせていた客を人質に捕ったようです犯人は

「人質を返してほしくば、金を1億用意しろ」との請求を求めてきました。

数々の

警察達が説得を求めても一向に動きを見せず

手の施しようがなく、真選組への出動命令も今さっき発動された所

です。

一体この事件はどうなるのでしょうか？

そして人質は無事生きてあのコンビニから出てこれるのでしょうか？

また新しい情報が入りましたら、お伝えします。

以上 こちらからの中継でしたー：

「はい結野アナ！ありがとうございます。

くれぐれも気をつけて下さい。えゝそれではまた新しい情報が入りましたらお伝えいたします」

ニュースEDOが終わると「だってそんなこと言ったってしょうがないじゃないか」と○ナリが発していた。

だがそんな名言を発している○ナリにも目もくれず、向かい側に座っている、

新八と顔を見合わせ、しばし時間が経ったー

そして新八は

ハッ！と思いだす

「まさか定春…。あの時コンビニに向かって鳴いてたのはジャンプの発売日のことを教えてたわけじゃなく…あそこに犯人がいるぞって知らせようとしてたんじゃ…」

「じゃあ…銀ちゃんは今頃…。」

「……………」。

ダッダッダッダッダッ

ボタンっ！

鍵を閉め忘れたことも気にせず
ただ：

“ 目指す場所 ” へと走る――

（銀さん…今助けに…）

（銀ちゃん…今助けに…）

二人の思いが重なった今――

救いの神は

微笑むか――

それとも――？

知らない人に自分の名前を呼ばれても一応100%スマイルで振り向け（後書き

オリキャラいつ出て来るのか自分でもわからない…。

占いのラッキーアイテムって必要なさそうで実は幸運の持ち主（前書き）

やっこのことで、オリキャラ参上っ!!

占いのラッキーアイテムって必要なさそうで実は幸運の持ち主

～inコンビニにて～

“ バアン— ”

一つの銃声が鳴る—

銀時と長谷川さんはそれぞれ死を覚悟していた—目を開ければそこには見たこともないエンジェル達が俺を連れてあの世にいくのではないかとそんなことを思いながら…。

だが心のどこかでは

（銀さんが撃たれろ—）

（長谷川さんが撃たれろ—）

と反面思っていたかも

しれない—

――両手で体を軽く摩り
撃たれた場所を探す――

……

……

……あれ？

ゆっくりと目を開け自分の 体に視線を向ける……。そして瞬きを2、3回する。両者二人共――

撃たれてなどいなかった――血が一滴も垂れておらず痛みっすら一つもなく……

彼等は、生きていた喜びを言葉や身体で表現するのではなくハァーっ……と息を垂らして喜びを表現した――

だが安心してゐる暇などない――

だったらさっきの

銃声は一体……？

たまたま

弾が入ってなかったただけか？

それとも 外れただけ？

否、ターゲットを変えたのか？

だったら誰に…？

イッイヤ…イヤア…」

「！！」 声がした方に体を向ける…

そこには…

高校生くらいの女性がもう一人の高校生に体を揺らされていた―

見るかぎりその女は

ただ体を揺らされ続けているだけで微動だにしない…

ピクリとも動かず…

身体を激しく揺らしながら大声をあげ呼び続けている声にも応答せず――

「ちよっ…先輩方…？ なっ何して…」

「あーあ可哀相にな…お前等が騒ぎもしなかったらその女は身代わりにならずに済んだのによ…。全てはあんたらの失態が招いた結果だよ…。」

今だに銃口からは灰色の煙が薄々と出ている――

女を撃った黒づくめの男は銃口に向けて、フツと息を吹き込むと灰色の煙は、サーッと静かに消えていった――

「サナっ…サナ…起きてよ死んじやいやだ……！」

「サナ」という名は多分撃たれた少女の名前だろう…。

少女の友達は必死にその娘の名前を呼び続ける…。

無駄だ…。と

分かっているながらもその娘は少しの『軌跡』を信じながら…

「…たらっ

だったらなんで…なんで俺達を撃たなかった！どうして罪のない人間を撃つ必要がある！」

―銀時は、黒づくめの男達に鋭い目をやる―

「あぁっ？お前自分が撃たれなかったただけ有り難さを営め。変わりにその女が身代わりになった…。ただそれだけだ…。」黒づくめの男は、顔は少し微笑みながら、そして呆れたかのように発する―

「というか…。あんたらが騒いだせいで外は仮装パーティー会場に変わってるぜ…。ましてや警察までもがこんなに群がってるたあ俺達あこんなところで　　捕まる訳にはいかねんだよ…。

どうせてめえら逃がしても被害者としてマツパに

とっ捕まえられ聴衆され…

あげく俺達は、牢獄行きだ

そうなる前に…」

カチャ―

カチャ―カチャカチャ…

「あんたらも…すぐさま

息のね止まらせてやっから安心して逝ってくれよ…

…今ならあの女とでも会えんじゃねえのか？」　クスクス…笑
いながら、黒づくめの男達は人質（銀時含め…）に向けて、銃を向
ける―

銀時は、「洞爺湖」と描かれた木刀をギュツと握りしめる…が
相手は拳銃を持っている…ましてや自分が動けばまた犠牲者がでる
ということを想定し、ただ黒づくめの男達を睨むことしか出来ずに
いた…。何もできない自分に唇を噛み締め手汗が滲むほど木刀を握
りしめたまま…

「ではでは皆…さん」

カチツ…

―引き金を引く

「未来でまた…」

会えたら…」

……

誰もが死を覚悟した…

—銀時と長谷川さんは二回目の死を覚悟して

—だが…

次は本当の死を—

「……………だ」

「あっ…？」

「死ぬのはてめえーら
だああああああ！！！！」

耳を塞ぎたくなるような声をあげたほうに視線ごと体を向ける—

そこには…

さっきまで、「サナ！」と

名前を呼び続けてた高校生があの時とは、嘘のような顔つきをしていた――

瞳孔は開き、ずっと見ていれば今にも殺されそうな顔をしていた。てかもうもはや、

鬼の形相と呼んで良いほどの――

――すると

いつのまにか何処から取り出したか知らないが

その高校生の手にはバズーカが抱えられていた――

（まさか……？この状況ってまさかのまさか……）皆が、口に溜まっていた唾を飲む――それが合図のように

バゴオオオオオン！！

コンビニは屋根ごと吹っ飛ばされ、黒づくめの男達は皆、外に放り出された――。

銀時達は、黒づくめの男達とは逆の方向に居たため、なんとか命だけは免れた

だが

銀時等は、顎が外れたかのようにポカーン……開いた口がなかなか塞がらない……。第一何故、高校生がバズーカなんぞ危なっかしい道具

を持ってるんだ―？
というのが、
疑問だった―

一方その女は、モクモクと茶色い砂煙が出ている所をシルエットを見せながら歩いていき、砂煙から出て来る時に 姿をあらわにした。

「たくつとんだ茶番に付き合わされたです！」パンパンと服についた砂を払い落しながら

「ちょっと新羅っ！！いつまで屍、気取りしてるつもりですっ！何が「サナ」ですか！！偽名も冗談もほどにするですっ！こんな長い芝居討ってあげたんですから給料60%翠羽に渡すです！」

（えっ なっ 何…？
この娘？芝居とか言ってるけど…？サナ…？偽名？
って…まさか
…この女…）

ゆっくり首をその『サナ』という死体…に向ける…！

「……ちょっと…バズーカだけは使うなって言ったでしょ…！いくら威力が1／3だからって警察がコンビニ全壊してどうすんのよ！それに給料60%なんてあげれるわけないでしょ…」

あんたこそ冗談ほどほどにしなさい」

死体が話した…ましてやむくつと起き上がる

ーコンビニの中の人々は、（アア…アアア）と絶句した…と声が震える…

そして、すぐに立ち上がり、銀時達のすぐ横を通りすぎる…。

死体だったものが…

「全く…？今日の占いは

12位だって言うから、たまにはラッキーアイテムでも信じてみようかなと思って見てたら、『フライパン』

って書いてあったたから、お腹にしまつていたけど、まさかフライパンのおかげで命拾いするとはね…。」

スッとお腹から出すと、

さっきまでのポッコリお腹とは裏腹

とてもスタイリッシュなバランスの良い体型になったー

フライパンには、確かに、銃弾が当たった後が

はつきりと残っていた。そのフライパンを小さい円を描くようにクルクルと回しながら、今だ絶えることなく出ている砂煙をくぐり抜け、ふて腐れ顔で待っている高校生のもとへ向かう――

「貴様等…何者だ…。」

バズーカが放たれた時に熱風が黒づくめの男達をとり囲み
そのまま男達を晴天の空の下へと追いやる――

その衝撃で身体が痙攣し動けずいた男達はその二人組の高校生を下から睨みつける――

「あーそっか…。これからあんたらを
あそこ

牢獄に放り投げる最、名前も知らない人にやられちゃ

虫の居所が悪い

ものだしね…！

自己紹介しといたほうが良いかもしれないわね…」

赤と黄色のチェック柄スカートのポケットから、スツと小さな手帳を取り出し、

バツ！ と片手でその中身を男達に見せる――

「はじめまして諸君等…

つい最近、新しく『隊長』として任命された

真選組四番隊隊長

連沢新羅…っ」と

ちらっとな横に視線を送る――

……

…ハァーっとな

一つため息をついてから

「同じく『副隊長』として新しく任命された

真選組四番隊副隊長

奥平翠羽…ですう…」

言い終わるとその高校生…否、真選組四番隊隊長
連沢新羅は

「よろしくっ♪」

とニコッと威勢の良い声と満面な笑顔で

自己紹介を終えた――

占いのラッキーアイテムって必要なさそうで実は幸運の持ち主（後書き）

コンビ二篇は終わりです！

次からは、本編？らしいのが始まります♪

インスピレーションが素早く働く人ってなんか素晴らしい

「ばっ：馬鹿な！！真選組は男しかいない武装警察の集団のはずだ！！女が所属してるなど聞いたことがない！第一、女が『隊長』などに任命を任されるなど以っての外！お前達のような女がこの俺達：いやましてや攘夷志士などを捕らえられるわけなっ：グジョブウ！！」

一人の男の顔は顔面から一瞬にして地面に埋め込まれた！
その翠羽という女の足に操られるかのように――

地面はメキメキ：と痛々しく悲鳴をあげるも、翠羽はそんなことお構いなしに男の後頭部にローファアを履いた足を乗せ地面へ誘う――

「女女女女：うっざしいです。」「ヴグウっ！」さらに足に力を加え、男の後頭部が見えなくなるくらい地面に押し付ける――

「女舐めたら、怖いですから！」

フフフ：と優しく

黒い微笑みをする彼女はまさしく…サドっ！

皆がゾゾゾっと鳥肌が

立つくらいに―肌で実感した

「翠羽：ほどほどにしなさい。それ以上やったら本当に死ぬわよ。それ」

それと指差すのは地面に

押し付けられている男のことだった。

確かに、地面に押し付けられている状態なのだから

その男はまともな空気を取り入れられる訳もない。

虫の息ほどにしか

してないのは事実。

「……新羅がそこまで言うなら……少しは手加減しても良いです。」

少し力を緩めた。

だがけて、足を退けた

わけではなく、まともな空気を吸える程度に…。

「そろそろ、あの人等も来る頃じゃない？」

あの人等…？ ああ…真選組のこと…。

と、新羅の顔を見て、頷く

「ほら、もう少しの辛抱です。牢獄に入る覚悟は出来てるんでしょね…。」

黒づくめの男達に聞こえる程度に声を出す。その声は男達を脅迫するかのよう

男達の身体は今だに痙攣しているため、逃げようにも逃げられずにいた。牢獄に入る準備は万全だ。

一人除いては…。

「クククッ…俺達はてめえーらマップに捕まる訳にはいかねえんだよ…。」

「ハッ？」 声のする方に身体は動かさず、視線だけを送る。

黒づくめの男達は全員身体が痙攣していて動けずにいたかと思っていたが、

その男だけは、身体は動けずも、手首だけは動かしていた。そしてすぐ傍にあった銃を新羅へと向け…

「あばよ…」

と言い残し

二回発砲した

その一部始終を見ていた、結野アナ達も、声に出せずにその映像をテレビに映させてることしか出来なかった。

男は勝ったとも思ったのだろう。

男の額には「勝利」という文字が浮かんでいた。

だが

「無駄ですう…」

ポツリ…と呟く。

そして視線を前に戻す―。

「いっておくけど、新羅…」

「!!!!!!」

皆、またまた顎を外す…。

なんせ、新羅は明後日の方向に身体を向けながら、
フライパンを持っている
手とは逆の手で

「こんなんで、命落とすほどヤワじゃないですから！」

人差し指と中指の真ん中に二つの銃弾をしっかりと挟んでいたのだからー。

「アッアア………アッ……！」

銃を構える手が震える…。

新羅は、振り向き
間に挟めた銃弾を男に微笑みながら見せる。

そして、その銃弾をフワッとスロモーのように投げ、ガシッと素早くキャッチする。「翠羽…。」

「はいっ♪」

威勢の良い声で振り向く

「その男…。私が管理しとくから貴方はこの男に“女の恐さ”というものを思い知らせてあげなさい♪」

バチッ☆とウインクしながらとんでもないことを発した。

「アイアイサーです♪」

二人は、持ち場を交換し、翠羽はムチ、新羅はアメの使いようを分けた―

その時、

頓狂な声が、歌舞伎町に

響いた―

「御用改めである！真選組だ！」

武装警察真選組とはまさしく彼等のことを言う
：別の名幕府の犬は
今現場へと到着した。

「あっ！来たです！ニコチン中毒ー！！」ブンブンと手を振るー
満面な笑顔でー

「？誰がニコチン中毒だ！！……
ていうかお前等なんだそれ…」

「何って？」頭にクエスチョンマークを浮かばせる。

「お前の後ろの煙が出てる物体。んで連沢の踏み付けてるそのやつ。
」

「何って…」

「このコンビニを襲った」

「強盗犯どもだけど？」
声を揃えて

「何か？」と言う。

「おっお前達、まさか二人だけでこいつらをとっ捕まえたのか！」

真選組局長ゴリ…近藤勲が焦りながら問う。

「そうだけど…。何か問題でも？」

「凄いいじゃないか！お前等！問題以上に、お前等の手でこの強盗犯を捕まえるとは…！やはりお前達を隊長、副隊長に任命して良かった！」

俺の目に狂いはなかった…「あったよ！！アンタよく目擦ってよくみてみる！！なんでこいつ地面に頭減り込んでるの！なんで

身体から煙出てんの？なんでコンビニ全壊してんの！」
一つ一つ指を差しながら、堪忍袋がキレるほど
どでかい声をあげる。

「だってこいつらムカついたんですもん！なんか女女女女…うっざ

しかったし」

「それはただてめえ自身のムシヤクシヤを晴らしたかったただけだろっ？

じゃあこのコンビニは？」

「それも翠羽がやったことです！こいつら新羅に発砲したんですよ！それがムカつかないでいられますか！だからバズーカ使って外に吹っ飛ばしてやったです！」腕を組み、鼻をフンツと鳴らす。

「お前のそういう神経を吹っ飛ばしたらどうだっ！！
てかどこからバズーカ取り出した！！」

「いや取り出したっていいか…元々あった…的なの？」

「はっ？」

「すいません。土方さん…俺この事件が起きる前にこのコンビニにバズーカ

置いてきちゃいやした…」真選組一番隊隊長沖田総悟は土方をキレさせようと挑発した。

「おんめえは！！！！」

ピキッと血管がキレる直前に新羅は

「まあまあ…バズーカがあったからこそ人質の命が救われた…って
思考パターンをプラスに変えても良いのでは？」

と言われ、

なんとか修羅場にならずに済んだ。

総悟が小さくチツと舌打ちをしたことは誰も知らない――

「おいっ！奥平っ！てめえは後でしょっぴいてやる！

にしてもコンビニはこの有様……！！

ってことはまさかお前人質…」

「まさかっ！

私もそこまで馬鹿じゃないです！こいつらやコンビニはともかく
人質の命は全員無事ですう！」

任務は遂行した！とでも言いたいのかグッジョブサインで現した。

警察ともあろうお方が人質の命を取る失態など起こしたら幕府の犬
の恥の上塗りどころか今この場所で

彼女等の腹を斬らなくては示しがつかない――

そんな手間が省けた土方は「そうか…」と一言だけ告げ

コツ…コツと靴を鳴らしながら歩いていき、

全壊したコンビニ（一応）？のなかに入る前に、煙草を地面に落と
し潰した後

人質のもとに歩み寄る―

「すみません…皆さん。怖い思いをさせてしまい本当にすみ……………」

ちらっと人質が集う場所とは異なる場所に視線を向ける。

正確に言えば、人質達の集う場所のちよいと左側に視線を向ける―。

「万事屋…？」

「んあっ…？ニコチン中毒…！」

ピキッ―

「ニコチン中毒じゃねええ！」

今度は完全に血管が切れた―

ダッダッダッダッ―

ガシッ―

銀時に近寄り、胸倉を掴み無理矢理立たせる―

「おい！てめえ、こちらら今無性に虫の居所が悪いんだよ。あんまりストレス抱えさせんな？」

眉をピクピクさせながら銀時に言う。胸倉を掴む手をバツと離し、逆に銀時が土方の胸倉を掴む―

「アアっ？お前誰に物言ってるの。こっちはジャンプ買いにコンビニ寄っただけなんだよ。」

なのに何これ。

なんでこんな事件に主人公が巻き込まれてんの！！なんで危機的状況にあってんの！」

胸倉を掴む手をバツと離し、また土方は銀時の胸倉を掴み今度は壁にダンッ！と激しい音と共にぶつける！

「んなてめえのおつかい話なんぞ知らねえーよ？
いいからとっとと失せろっ！！目障りなんだよっ！」同じく、銀時
も土方の胸倉を掴み反対側の壁にぶつける――

「アンタさあ、こっちは
被害者なんだよ！れっきとした“人質”なんだよっ？もう少し扱い
良くしたらどうだ」

ガシッ――

「てめえの何処が
人質なんだよ。おめえがおだぶつしてくれるんだったらちっとは扱
い方を変えてやっても良いぜ」

「アアッ？」

「アアッ！！？」

コンビニの中でガミガミと激しく口論する二人の声ははっきりと外
に漏れていた――

「にしてもてめえらんとこのやつどういう教育させてんだよ！」

「やつ…?」

「ちょっと!! アンタたちの声外にタダ漏れしてるんだけどー! もう少しポリューム落とせばー?」 コンビニの中に耳を塞ぎながらやってきた

新羅 そして翠羽

「そう!! やつって

この女共の事言ってるの!」

銀時は、彼女等をビシッと指差しながら言う。

「多串君っ!! 君この娘達にどんな教育させてんの!! なんでこんな女共がてめえらみてえ糞集団の隊長、副隊長に勤めてんの!! つーか武装警察に女が入ってる時点で可笑いだろう!!」

ゼーゼーと激しく

息をならす。

「それに…」

「あっ?あのさ…。」

新羅はちよつと困り顔で話し掛ける――

「此処で話すのもなんだから外そっちで話さない？」

皆頷き：「そうですね、

そうだなと言ひ

外へと歩き出す――

新羅は、歩きだす前に
人質の皆に顔を向け

「皆さんも外に出てください。この建物いつ崩れるかわかりませんし、中には怪我をしている人もいるやもしれないですから。

今四番隊が皆さんを手配してくれます。今日は本当に申し訳ありません。」

礼儀正しくお辞儀をし、

「後でまた改めて謝罪させて下さい」と言つて
歩きだす

外では、四番隊の隊士が

万全な態勢を整え、指示が出るのを待っていた。

隊士達の横を通り過ぎる最

「後はよろしく…」
と指示を出した

「はっ…ハイッ!!」 隊士達は、自分のポジションへと着く―自身の仕事を成し遂げる為に―

外に出るときさっきまで銃を向けていた男達は、真選組に取り押さえられ、パトカーに入れられていたり

マスコミに取材を受けてテンパっている真選組等など…。
外はガヤガヤと騒然な不陰気になっていた―

「おーい! こっちこっち!」

翠羽は初対面にも関わらず馴れ馴れしく呼ぶ―

「ハァー」 つと頭をボリボリかきながら二人の元へ行く

「…あれっ? 多串君は…?」

さっきまで口論していた多串…土方は何処にもいなかった。

「たぐ…？」

ああーニコチン中毒ですかー！ニコチン中毒ならマスコミに捕まっていますよ！」ホラッと

笑顔でその方向に視線を向ける。そこには報道陣の真ん中に立って取材を受けている土方がいた。

「まっあんなやついないほうが話は進むです！
気にしないー気にしない！」

手を横に振り、気にしない…と振る。

「おっ万事屋…！！お前なんでこんなところに…？」

近藤が、コンビニの中から出て来て、こちらに気づいたらしく近寄る。

「やあエネゴリくん…！」

「あっ近藤さん…！」

近藤さんもこの方とお知り合いなのですか？」

新羅は近藤に問う。

「まあな、知り合いというか腐れ縁ってやつか？」ハハハっ！…と

両手を頭の後ろに回しながら照れ臭そうに笑う―今此処に土方が居合わせていたらまた修羅場と化していただろう…。
多分…！

一方銀時は

ケツ！と耳をほじくりながら明白あからさまに言う

「へえーそうなんですか！」新羅は優しい笑顔で微笑む

「あっ…！お前等も自己紹介したらどうだ…？お前達も晴れて隊長・副隊長に任命されたんだ。名前くらい覚えてもらう義務くらいはあるだろう…？なっ万事屋！！」

肩を、パンパンと叩き、無邪気な笑顔で「なっ！」と
言う―。

「あっ…ああ…」

（もう知ってんですけど！強盗犯に教えてた時、俺もうしっちゃったし！

てかもう小説の内容のなかにモロ名前ポロリしてんじゃん）「んじやあ…私から

私は真選組四番隊隊長

連沢新羅…」

「同じく真選組四番隊副隊長

奥平翠羽

です」

「よろしく…です。」

万事屋と手を交わす―

「よろしくね…万事屋さん」「えっ―」

銀時は、啞然とする―

「そんなびっくりした顔

しないでよ！土方や近藤さん達が貴方の事そう呼んでたから呼んでみただけ…！なんか悪かったかしら？」

「あっ…いやそういうことじゃなくて…。」（今の…………。）

「フフフっ…頼もしい人！反応が鈍い人って私好きよ！」

「はっ…？」

「嘘嘘ー！

からかってみたかっただけ☆…というより私貴方の名前も知りたいんだけど…。紹介して貰いたくなって…。」

「あっ…俺は坂田銀時。」

“万事屋銀ちゃん”って所で働いている。」

「あゝだから皆万事屋って呼んでいるのね！んじゃあ…ええって…
銀時って呼んでも良いかしら？」

「ああ呼び方は別に何でも…」

「そう…じゃあ改めてよろしくね！銀時…」

「こっちこそよろしくな…」

二人は手を交わす―

？

……何かがおかしい…

………何かが…

…！

(…こいつ…！まさか…。)

銀時は何かを察知したらしく新羅の顔をジッと見つめる。

ハッ！！と新羅はそれに気づいたらしくバツ！と交わした手を無理矢理離す。

「そっ…

それにしても今日は雲一つない晴天な空よね！」
新羅は何もなかったかのように空を見上げた！。

「ああそうだな…。」

（間違いねえ…こいつ！！）

ーチャン ーサン
ーんさあん、ちゃん

銀さあああんー！

銀ちややんー！

「！！」

声のする方に目を配った

そこにはー

インスピレーションが素早く働く人ってなんか素晴らしい（後書き）

眼鏡をかけた少年 と

チャイナドレスを着た少女

とてつもない速さで

こちらに迫ってきた

が

どんな人間も皆皆生きているんだ！友達なんだ！（前書き）

早めに更新しました！

どんな人間も皆皆生きているんだ！友達なんだ！

ものすごい速さで銀時等の前に姿を現した者―。

それは―

「新八っ！神楽っ！お前等なんで此処に…！」

「ゼー…なんでって…ハ―銀さん帰って…
来ないなって思ったら…ゼエー…テレビに…映ったのが…このコ
ンビニで…それも強盗事件だっていうから…」

「だから…ゼエ…私達…心配で心配で…家から飛び出して来たア
ル…！」

「

「おまえら…」

「ゲホッゲホッ…」

咳ばらいする神楽の背中を優しく撫で、片方の手を
新八の頭にポンッと乗せる――。

そして

「あんがとな…。」

銀時は二人にもう大丈夫だ…と微笑みながら告げる

神楽と新八は

ニヒヒ!! と無邪気に笑う

「銀時…。この子達は？」

新羅は、その場の空気を壊すかのように問う―

「あーこいつらは俺の…」

「家族ですっ!!！」

新八は、銀時の大きな
手を頭に乗せたまま振り返り、新羅に告げる。

「そうアル!! 銀ちゃんもこんな地味で冴えない新八も私は大好き
アルっ!!！」

神楽も、頬を赤く染めながら照れ臭そうに言う。

「まあっ血は繋がってねえけどよ！」

その三人は太陽の光のようにとても眩しく見えた―。

その笑顔が眩しくて―。

まるで

本当の“家族”のように

「そう…」

そんな三人を眩しく見ていた新羅は

また優しい笑顔で微笑んだ――

「って……？なんかすみません！初対面の方にこんな変なこと言うのもあれなんですけど……

なんだか僕達、“家族”

というものがどれだけ大切な事かってことを改めて分かった気がするんです！」

「改めて……？」

「えっ！

いや元々家族というものは大切なものだというのはわかっていた事なんですけど……なんだか……ねっ神楽ちゃん！」

「わっ私に振るなアル！！……んと………

とっ！とにかく！！

わっ私は銀ちゃん達が大好きアル！！／／／／

顔を梅干しのように、赤く染める神楽ー。

「プッ！神楽ちゃんそれ理由になってないよ！」

「ううっ五月蠅いアルっ！駄眼鏡！！」

「駄眼鏡って呼ばないで下さいっ！！！！」

「眼鏡ザルっ！」

「名前変えりゃ良いってもんじゃねえんだよ！」

「クスッ…」

てことは、つまりこの事件があったからこそ
貴方達の家族の絆がより一層深まった…！

って言いたいのかしら？」

新八と神楽は醜い争いをすぐにやめ

「えっいいいや…！…！」

そういう事じゃなくて？そのええつと…」

「良いのよ良いのよ！子供は単純で扱いやすい♪」

どっかの感情の鈍い人とは違ってね…」クスツと笑い、視線を銀時にちらっと向ける。

「はいはいっ！どうもすみませんね…。謝りますよ謝れば良いんだろ…。謝れば！」

銀時は鼻をほじくりながらハイハイっと言い、指についた鼻糞をプンッと飛ばす

「別に銀時って決め付けてるわけじゃないわよ♪」

「その“♪”やめてくんない？腹立つんだけどー！」

「そういえば…貴方達の名前まだ聞いてなかったわね！！よろしければ教えてくれない？」

「聞けえええええ？？？」

銀時の話をスルーした新羅は、キレられながらもまたもやスルーし、新八達に、「お願い…！」と両手を合わせ頼む。

「あつ勿論っ！！僕の名前は志村新八…って言いますよろしく願いします！」

「

「こちらこそよろしく♪」

だが新羅は、「よろしく」と心を交じらわせるも…

何故か手を

交わせようとはしない

それを、疑問に思う銀時―

「はい（＾Ｏ＾）／

次は私アル☆

私の名前は 神楽って言うアル

この歌舞伎町（町）の

女王ネ♪

よろしくアル♪」

「ええよろしく♪」

やはり

神楽にも 手を交わらせようとしなかった。

何故――？やはりあの時の……！

「んじやあ次は私…」

私は真選組四番隊隊長

連沢新羅

よろし…」

「お前真選組だったアルか！あのニコ中、ゴリ、サドがいる税金泥棒がいるあそこの四番隊隊長だったアルか！！」

「ええ……でも隊長に就任したのはつい三日前だけど……」

「三日前——！！！」

ガシッ―

神楽は新羅の両肩をしっかり掴む。だが身長が足りないせいかな神楽は爪先立ちをし背伸びをすることで新羅の身長にちょうどたどり着くことが出来た―。

「新羅！今からでも遅くないアル！今すぐ
“万事屋銀ちゃん”に転任するアル！！」

「えっええ？」

「お前あんな男真っ盛りな集団の中に居て、息苦しいって思ったこと一つ二つ思ったことあるだろっ！！」

「えっ…と、まあ…確かに二回くらいあったか…
ウグッ…！」

両肩に力をさらに加えられ棒直状態に陥った：

「だったら今すぐエネゴリ共に退職届け出しにいつて退職金搔っ攫って持ってくるヨロシ！！！」

「神楽ちゃん：それただお金が欲しいだけじゃ……」

「神楽：ごめんなさい……」

いつのまにか神楽の手は、新羅の肩から離れていた――

「あれ？」

神楽自身も自分の手がいつ新羅の肩から離れていたか知らずにただ新羅の顔を低い位置から顔を見上げることしか出来なかった――。

ポンツと神楽の頭に手を乗せ

そしてとても

あの時の笑顔が嘘のように――とても悲哀な顔で話し始める。

「私達が、この歌舞伎町の 庶民の命を守るが為、真選組に入ったのは 言うまでもないけれど

それ依然に この真選組に入った理由も有るのよ…。」

「理由…？何アルかそれ？」

「それはまた後で教えてあげる。いずれ言うときは来るから…。」

薄く微笑んでから、

頭をポンポンツと軽く叩くと後ろに数歩さがり
神楽から離れる―

「翠羽も自己紹介しなさ…あれっ…？」

翠羽……？ 翠羽！！」

辺りをぐるぐると見回しながら声をあげる――

「此処です。此処！」 声のする方に目を向けると翠羽は
いつのまにかパトカーの
助手席の窓から顔を出していた――

「なんか今さっき此処らでひったくり事件が起きたみたいなんですよ！
う！」

だからちよつと私達行ってくるですよ！」

「出してっ！！！」

ブオオオオオン！――

乱暴にエンジンを掛ける音が鳴り響き

もの凄い速さでスピードを出しながらUターンをし、気がつけば翠羽の乗るパトカーはありんこほどに小さくなって見えた―

「あちゃー？翠羽にも自己紹介させようとしたんだけどね…」少し苦笑いをしながら、「じゃあ…あのこの代わりに私が紹介するわね

あの娘は私と同じ

真選組四番隊副隊長

奥平翠羽

ちょっと口汚い部分もあるけど仲良くしてあげて…。

それにあの娘…

戦争孤児だから…。」

顔を俯きながら、翠羽の過去を話す―

「戦争で親を亡くしてからそれ以来、私以外の

人にあまり接しなくなっただけ…。でも

あの娘多分貴方達となら打ち解けあえるかもしれない

さつき銀時とも初対面にも関わらず、普通に対話していたしね！だから…」

「分かったネ♪

私こうみえてとてもフレンドリーアル♪すぐに翠羽とも仲良くなってみせるアル！！ねっ新八！」

「うん！僕達も翠羽さんと心通わせたいです！」

「そう！それはとても有り難いわ！あっでも一つ約束して…」

スッ…と

人差し指を唇の前に立て

「翠羽が戦争孤児だった事は貴方達以外誰にも口にして無いから、翠羽にはともかく誰にも口を滑らさないように…！」

「分かりました!!」

「新羅隊長ー!!今

翠羽副隊長から連絡が来ました！ ひったくり事件を起こした犯人を捕まえたいのですが、どうやら何か面倒事が起こってるらしいです。

事が大きくなる前に…と告げたあと連絡が途絶えました。

緊急要請です。いかなさいましょう。」

一人の隊士が新羅に
遠くの方から、ひったくり事件の事々を報告する。

「分かった！今すぐそちに向かうわ！」

隊士に告げると、フウーとため息をつき、銀時らの顔を見る――

「残念だけど、そろそろ私も行かなくちゃいけないわ！私も隊長としての指命も受けてもっているんでね…。」

近いうち、ゆっくりとまたお話ししよう…！今度は立ち話ではなく、ファミレスとかでね…その時は翠羽も連れていくから、改めて自己紹介させるわね…。」

「ハイッ！くれぐれも

気をつけて！」神楽と新八に笑顔で手を振り、銀時の横を通り過ぎる最―

神楽や新八に聞こえない程度の声で―

「良い仲間を持ったわね…

幸せそうで何より…
でも

気をつけた方が良いわよ…

貴方を狙う…いや殺うとしている人間がまだこの街に居るかもしれないから…」

耳元で囁くその透き通るような美しい声は、

銀時に

『恐怖感』…というものを抱かせる―

「っ！！！てめえ…！！一体

「！！！！」

新羅をキッ！と鋭い眼差しで新羅を睨む―

だが新羅は

怯える様子もなくただ―

異常と言って良いほどに、笑っていた―

だが至って普通の

笑顔ではない―

いびつに

微笑むかのように――

風が吹くと、新羅の髪は
一本一本が靡く――

靡いた髪は

その怪しく笑う顔に
覆いかぶさるかのように

風が弱くなるにつれ、髪は顔からゆっくり一本一本
離れていき、また元の
位置へと戻る――

その至って正常ではなかった顔は髪が元の位置に戻ったタイミング
と同様に、

顔もごく普通の女の顔に戻っていた――。

あの時の顔がまるで
嘘だったかのように――

あの顔は 幻だったのか―？
それとも―？

ニコツと笑いながら
「さようなら♪」

そう言い、銀時等に別れを告げた―。

新羅は小走りに走りながら

隊士達の元へ急ぐ―

その途中、

ニヤリ…といびつな微笑みを浮かべながら、
独り言のように―

「やっど…」

やっと会えましたね…。

この時をどれだけ愉しみにしていたか……

貴方には想像も

つかないでしょうけどね…。」

小走りに走る足をゆっくりと止め、

銀河の果てまで続く
遠い空へ向かって

歪んだ笑顔を向けながら呟いた―。

「白夜叉……………」と。

止めた足をまた小走りに走らせながら

女は自分の任務を遂行させるために

隊長としての任命を果たすために

—自分の持ち場へと駆ける

気付いた時には、

そこには奇妙に笑う女

は既に居なく

江戸を：歌舞伎町を護らんとする 勇敢な女が

一人そこにはいた―

どんな人間も皆皆生きているんだ！友達なんだ！（後書き）

新羅はどうして銀時が白夜叉だってことを知ってたんでしょうね？

それも後ほど分かります！

真夜中、一人で歩いてちゃいけませんっ!! だからといって複数なら良いとは許

銀) なぁ…。俺思っただけどさ…。

新) なんですか？

銀) この小説次話投稿すんの遅くね？

新) ……まっ…まあ…

人には色んな事情というものがありますからね！
仕方ないんじゃないですか？」

銀) その割にはアクセス数は良いってこれどういうこと！

神) いつも怠けてる作者のくせに、アクセス数は上昇って何かムカつくアル！

新) 良いことじゅないですか！どんなに作者怠けてたって裏では皆に見てもらえるよう頑張ってるんですよ！

銀) 怠け＞アクセス数……。これって新八＞メガネいけんじゃねえか？

神) それ良いアル！さすが銀ちゃんアル！！

新) てめえら…！

殺すううううう！

真夜中、一人で歩いてちゃいけませんっ！…だからといって複数なら良いとは許

―その日の真夜中

針は二回目の12時を回り

新たな日を

満月と共に迎えた―

かぐや姫でも降りて来そうな、どでかい満月の下を

二人の女は――

コツ…コツ…とピンヒールの音を鳴らしながら
暗闇を美しく奏でる―

「ハア―っ…全くう…何で翠羽達が見回りなんてやらんにゃいけな

いんですか？」

遡ること1時間前――

今日はどうも珍しく歌舞伎町内で事件が多く多発し、翠羽達はいつもの3時間は残業していた
無理に言えば、無理矢理
駆り出された！
と言っても過言ではない――。

屯所で食事を済ませた後、各自の部屋に戻り（新羅と翠羽は同部屋――）
今日あった事件の資料を見ていた

……勿論新羅だけ……。

翠羽は……、
頬に手を当て、肘を机につけながら資料を開いてるも疲れが身体を
蝕み
カクンっ――！と
首をうならせる――。

トントントン……

「誰？」

「俺だっ！土方だ…」

ガラッー

真選組副長マヨ…土方十四郎はつれない顔で障子を開けた――

「こんな時間にどうしたの？」

「レディーの部屋に何のようです！！」

「単刀直入に言う…！
てめえら今から
見回り行って来い！」

「はっ？」

彼女達は、阿吽の呼吸かのように息ピッタリに首を右に傾げる――。

「ちよっ？

ちよっと待つです！今日の見回りは沖田のはずです！なんで私達が…」

土方は「あゝあっ！」と唸り頭を抱えるー。

「アイツまたサボりやがった…？隊士達は全員別の事件^{ヤマ}の調査で今さっき屯所を出ていった。

総悟はどっかしらで油売ってるはずだ。俺は総悟を探しに屯所を外す。

近藤さんには、何かあった時の為に屯所^{とんじょ}に残ってもらおう！んで代わりにおめえらは歌舞伎町を見回り警護しにいけっ！」

「だからって！

こっちは今日の事件等で身体がもう悲鳴あげてるんです！私達女一同はもうまんじりと寝ないといけない時間…」

―バリッ！！

土方は指で障子を鈍い音と共に切り裂く―

「いつ何処で何時何分何秒地球が何回廻った日に俺がてめえらを女と認めたんだ？あゝあ！」

さっさとその眠たげな顔叩き起こして、歌舞伎町内とつと見回り行けっ！」

翠羽はその声で、

パッと目を覚まし

足の爪先から鳥肌がたつのを感じた。

翠羽と新羅は彼が

―鬼の副長―

と呼ばれる意味を改めて知ることとなる―。

―そして“今現在”と繋がる―。

翠羽は両手を頭の後ろで組み、
「ふぁーあ…」と悪評をする

「夜更かしは美容の大敵だったのに…！あのニコ中何も分かってないです！

っーかあのサド！！

帰ったらニコ中殺る前に

真っ先に殺してやるです！」

「翠羽：総悟は殺しても良いけど、土方は駄目よ！

総悟探しにいつてくれてるんだから！アンタが探す手間が省けたってことなのよ！礼の一つでも言ったら？」

（そ…そんな笑みで殺す…とか普通に言うアンタが1番駄目だと思うけど…。）

翠羽は苦笑いをしながら

「あ…ああそう…ですね」とつい敬語で返答する――

「に…にしても、今日は随分と綺麗な満月ですう！」

話を反らそうとするが、確かに今日は妙に

月に一度見るごく普通の
満月より、今日の満月は以上なほど赤い
紅色をしていた。

その満月から放たれている月光が彼女等を美しく飾る――。

「そういえば……。新羅貴方って……」

「伏せてっ――!!」

「えっ……ちよっ!……」

素早く翠羽の身体を地面に俯せにさせる――。

新羅も翠羽の隣で俯せ状態になる――。

……

五秒ほどたっただろうか？新羅は顔をあげる。

すると 前には

何本かのクナイが荒々しく地面に突き刺さっていた――。

「なーんだ……」

月に見取れて

勘付かないかと思った。」後方のすぐ傍から女の声が闇の中から聞こえてきた。

スツと立ち上がり隊長服に付いた砂をパンパンと叩き落としスカーフをキュツと締める――。

「相変わらず色気のない
登場ね……。」

クルッと髪を風に靡かせながら振り返り、電柱の頭についている青い髪のショートヘアの女を顎を少しあげながら見上げる――。

「久しぶりね……。」

蒼疏……。

└

真夜中、一人で歩いてちゃいけませんっ！…だからといって複数なら良いとは許

これでオリキャラ全員集合しましたね☆

○時だよっ！全員集合ー！

髪の毛って何本あるんだろう…。（前書き）

いやーめっちゃ更新してなかった？おかげで、アクセス数がヤバスヤバスっ！！

ではどうぞ！

髪の毛って何本あるんだろう…。

「蒼琉っ!!」

「やあ翠羽っ!久しぶりの再会だね…」

そう言った後、蝶が舞い降りるかのように電柱から地面に降りる―。

「蒼琉ー!!!!」

まるで

はしゃぐ小さな子供かの

ように『蒼琉』という少女の元へ腕を横に真っ直ぐ

伸ばしながら駆け出す―。そしてバツ!と蒼琉に抱き着く―。

「蒼琉!会いたかったです!まさか此処に来てから4日も会えなかったとは思わなかったですう。」

翠羽は、蒼琉の小さな身体をググッ!と締め付けるように厚く抱く。
今にも骨が折れそうなくらいに…。

「そんなおおげさ過ぎだよ。たかが4日だろっ？」蒼琉は締め付けられる自分の身体に我慢っ！と言い聞かせハハハ…と笑いながら堪える！。

「でも…この四日何処に行ってたですか？」

「ちょっと用事があってね君にも一応関係のある話だよ！」

「なっなんですか！！翠羽に関係のある話って！？」

「ハハッそのうち分かるよ…。」

「だけど…。」

目つきがコロッと変わり

「君にはとても関係深い話だけどね…新羅」

翠羽に向けていた笑顔とは裏腹に新羅には

感情の一つのカケラも無い顔をスツと新羅へ向ける。

「せっかくの久々の再会だったのに何その別人のような顔！」クス
ツと肩を竦め

蒼琉にニコツと微笑み 投げ掛ける―。

「そうですよ蒼琉！せっかくの再会なのですから新羅に……」

そう言い終わる前に、翠羽の瞳から蒼琉の姿が一瞬にして消え去った―。

「えっ……………ちょ蒼…」

辺りを見回すと、蒼琉は翠羽から離れ、変わりに新羅の前方にいた。

だが

蒼琉はただ新羅の前方に立っているのではなく新羅の胸倉（隊長服のスカーフ）をグッ！と蒼琉自身の身体の近くに無理矢理寄せる――。

「まさかとは思うけど
これただいまの挨拶？」

新羅は胸倉を捕まれながらも今だ微笑む。

「そういうことにしておこうか新羅……。

話を戻すけど……。

君は此処最近にて真選組に入った。それも隊長にまで就任……。別
別にそれは君個人が決めたことだから、口を出すつもりはないけど
……。」

蒼琉は、胸倉を掴む手にさらに力を加える――。

「僕達は
歌舞伎町

(このまち)に遊びに来たわけじゃない

それくらい、覚えてるよね

「ていうか

蒼琉…首が痛い…離して」

胸倉を掴む蒼琉の手首を掴み、離そうと手を左右に揺らす―。

「新羅…。僕達は……」

「蒼琉…手」

「あの方を…!!」

「手っ！」

「あの方をさ…」

ガシッ!!

「だから、離せつつってんだろうが…」

まるで別人にでもなったかのように新羅の目つきがギロツと鋭くなり、胸倉を掴む手を無理矢理剥がす――

「言われなくてもアンタの言いたいことは嫌というほど分かる……。だけど、私達は歌舞伎町（このまち）にまだ来たばかりじゃない？…。ましてやまだ一ヶ月もたっていない。」

だから……」

「ヴッ！！！」

蒼琉の腕を掴む
新羅の爪が蒼琉の腕に深く食い込む――

「もう少し様子見をしたほうが良いと思うんだけど…

「どう思う…?」ニコツと微笑みを浮かべる―。紅い月光が当たってるせいか、新羅の微笑む顔がいつになく怖い―。

バツ！

新羅の腕から逃げ、新羅の傍から7歩ほど後ろに下がる―。掴まれていた自分の腕を見ると、傷一つ無い

白い腕を

赤黒い液体が

ツ―ツと一本の長い線を作り、やがて地面に滴る―

「言われなくても……

計画は実行する…

コツツコツツーと川辺の近くへ行き、水面に写る月を数秒上目遣いをしてから

上空を見上げ、本物の月に目を向けるー。そして

バツ！と片手を奇妙な紅色に染まる満月にニコリ…と笑いながら手を翳すー

「もう少しし……

もう少しで…

計画が実行される…

だから…」

「新羅貴方まさか…」

「翠羽…これは僕達への指命だ……。何がなんでもあの方に……。」

その時、奇妙に照る

紅く染まる月から放たれる紅い月光を浴びる

その

三人の女は

まるで――

「それと、蒼琉……」

「何？」

「もしかしたら、私の正体ある男に知られたかもしれない…：そしたら…」

「分かってるよ……」

その時は……

殺せばいいから……」

返り血を浴びた鬼のようだった―。

髪の毛って何本あるんだろう…。(後書き)

なんか内容が変なんなってきた。ヤバス…

だるい時に勉強はかなりキツイ(前書き)

銀魂新巻買いましたー♪

まじ面白い○○♪

だるい時に勉強はかなりキツイ

翌朝…

ここ数日は雲一つの無い
晴れ晴れとした天気が続く。

その青い空は、彼方まで続き目を細めて見ても雲という物体は
何一つ
見当たらない

秋風は 遠い山々から
落ち葉を舞かせ

次の町…次の町と過ぎ
歌舞伎町へと運ぶ―

その葉々の数枚はまた
風に煽られ、

「万事屋銀ちゃん」

と書かれた看板を通り過ぎると

また

新たな

遠い旅へと再出発をする

「暇……………」

「暇アル……………」

今日は、

晴れ晴れとした天気Ⅱ

仕事の依頼殺到！！！！

なんて夢のまた夢の話…。

現在午後2時ちょいを回った。今日は仕事の依頼が待ったくと言っている程来ない…。

外へ出て、ファミレスにでも寄り食事をしよう！……………

なんて

そんな余裕な金はないっ！！！
この頃

仕事の依頼は一日に多くて

二回っ！！！！

飯代など

家賃代へと姿形を変え何処かへと旅立つー。

他にも

定春の飯代・トイレの砂等でパーになりペット？の生活用品のほう
が人間様よりも図りしれない。

そもそも銀時等に

“ファミレス”などという

高台へと駆け上がることはまず無いー。

「にしても暇だ………。

まるで三ヶ月前のジャンプをみて

「この展開何回もみた……。確かヒロイン死ぬんだよね……。ホント泣
いたわー。」

みたいな飽き飽きしながらもジャンプを捲る

心が満たされるようで

満たされないあの感情と何か似ている……」

銀時は、ソファーに横たわりながらジャンプのコマを一つ一つ目を
落とし、ピラッ一枚捲るー。

「というか腹減ったね！」

新八一！！ピザ持ってくるヨロシっ！！」

「そんな金あるわけないでしょー！ただでさえ今月分の給料貰えるかどうか分からないんだし…。」

新八は割烹着とマスクを着用し、右手には
はたきを持ち柵をパンパンと叩きながら

「銀さーん！！今月分の給料大丈夫なんでしょうねー？」と飽きられ
声で言う。

「あー大丈夫大丈夫心配するな……
今月分のでめえらの給料から差し引いて俺のパフェ代に加算される
からっ！」

バツー！！！！！！

「何が大丈夫大丈夫だよっ！何差し引くって！！なんで僕達の給料がてめえのおやつに加算される訳っ！！」

新八は無理矢理ジャンプを取り上げて、銀時の顔の近くで怒鳴る――！

「まったく！耳元でうるせえーな！！仕方ねえーだろ仕事の依頼が来ねえーんだから……。俺は糖分食わねえとこの先どうなっちゃうか分かんねえんだから俺の糖分の為に給料分けてくれよ

なっ！」

「なっ！じゃねえーよ」糖分控えろっ！！！！そしてその金給料代としてこっちに渡せっ！！天パ馬鹿！！」

「何その天パ馬鹿って！！お前そんな変なあだ名なんて付けっからろくにフィギュアとかキーホルダー出ねえんだよ！羨ましいだらっ駄メガネちゃん！」

「駄メガネじゃねーよ！！つーか今関係ねえーよ！！この元タマ無し！！」

「あゝん！！なんだ
やんのかゴラァッ！！」

「あゝあッ！！
なんですか！！！！！！」

「ちっちゃいアル…………。」

神楽は小指を鼻の穴に入れほじくりながらボソツ…と吐くー。

ーピンポーン

「居留守でえーすよ居留守ー。」投げやりに手をシッシツーと振り、
玄関先まで聞こえる声で口を大きく開くー。

ピンポン―

「銀さん出たほうが良いんじゃないんですか？」

「馬鹿！策士裂くとはつまりこういうことだ新八。」

一つため息を零して

「こういう時間帯はヅラが来る時間帯とちょうど一致している。どう考えてもあの玄関先に居るのはヅラしか考えられねえ」

「でも銀さん。桂さんならインターホン押しながら「銀さーん！あーそーぼ！」とか良く言うじゃないですか！それが聞こえないってことは違う人なんじゃ…」

「ヅラも毎回同じポジションで来るとは思えねえ…。まず裏の裏を読む事こそが侍への第一歩だ。覚えとけ！」 「銀さん…」

「てなわけで……新八」
ビシッと指差す――!

「玄関行ってこい!!!」

「ハッ？」

「だから玄関：行ってこいって行ってんだよ！」

「はっおまつ…アンタさつき裏の裏を読めっとか言ったよね!さつきと言ってることまるつきり反比例になってんじゃねえか!!!!」

「んなのちよつと主人公として“侍”的な発言取り入れる為の策に決まってるだろっ!コンビニ篇では作者に邪魔されたからな…」

「知らねえーよ!!!少しは尊敬出来るなと思ったら…」

「新八く!ゴタゴタと

口開く暇あんなら足動かせ足く!だからいつまでたっても人気投票

ミラクル８なんだヨ!!」 「てめえーらさっきから僕のコンプレックスに口叩かねえーと気が済まんのかああ!!!!」

「えっミラクル８コンプレックス気味だったの? そうかそうかだったら玄関行ってこい!!!!」

「意味分かんねえーよ! コンプレックスと玄関何もイコール関係ねえけど!」

ーピンポン

「ほら新八!!」

「ほら新八!!」

銀時と神楽の声が一致する

「ッ!! ハイハイっ! 分かりました。出れば良いんでしょ出れば…」

新八は割烹着とマスクをこもこも言いながら外し、はたきを棚に置

いてから玄関に重い足取りで向かう―

途中

廊下を歩いてる最中に

「なんでいつもいつも僕が…」と口を尖らせブツブツと言いながら、
玄関へと近づく―

「ハイハイどちら様ですか！桂さんだったら僕…」

ガラッ！と引き戸を開ける

「……………あっ！」

玄関先のところに立っていた人物に思わず声を上げた。

「どうした？新八一？新聞ならすぐに断……」

玄関先に立っていた人物

それは

着物はボロボロに破け上は泥が至るところに付いており元の色が何色なのか分からないー。

髪は結ってるのか結っていないのか分からないボサボサした髪ー。

ガリガリに痩せて目には隈がいくつも出来

今にも倒れてしまいそうな貧相な顔をした

男が一人

そこには居たー

お金の使い道はよく考えてから使え！

そのガリガリに痩せた男は静かに口を開く――

「あつ……あの……万事屋さんでいらっしやい……ますか……」

その男は多分依頼人であろう。そう心の中で確信する。

「えっあつ……はい。あつ……あのーとりあえず中にどうぞ。」

新八はその男を部屋へと招きいれ、ソファ―に座らせる……。

新八は奥の棚から少量のお菓子と湯呑みを持ってきて銀時、神楽、男の分のお茶を注ぐ。その

湯呑みを一つ一つ前のテーブルにコトツ――と置く――。

「んで……。俺達に今日は何のご用で？」 「銀さん。まず名前を……」
新八は耳元にコソツと言う

「ああ……まず名前をお聞きしたいのですが……。」

「たっ…高梨…健三郎です。」

「高梨さんって名前なんですか…。んじゃあ名前も知ったことなんで今日は何のご用で…?」

（お前どんだけ依頼内容聞きてえーんだよ!!）
新八は拳に力をぐっ!と入れる―

「やっ…。」

「?」

「助けてくださいっ!!」

その男は頭をテーブルすれすれまで深く下げる!

「貴方達も

知っておられるでしょう?あの!!」「連続庶民殺人事件」…」

「……!!」

確かその事件って幕府の元で運営する人・また幕府のお偉いさんなどが狙われるのではなく、善良な一般市民だけが狙われる近頃この街に起きているあの…！」新八はその事件について

「前にテレビで見ました」と口を開く――

「そうです……………」。

そして…………私の愛する家族もその事件に巻き込まれ、皆っ！…………皆死んでしまいました…！」

男は涙をボロボロ流しながらそのぐじゃぐじゃになった顔を服の裾で拭く――

「じゃあアンタの依頼は、その家族とやらを殺った犯人に仇討ちしたい！
ってわけか…？」

銀時は湯呑みに入ったお茶を一気に飲み乾す。

「でもそうだとしたらどうして警察とかに頼まないアルか？」
神楽は片眉を少し上にあげる――

その言葉に男はビクッ！と肩を震わす――

「そっ…それが
その庶民を狙う犯人ってのが

真選組の者だと…」

「えっ…！」

三人は目を大きく見開く。

「ちょっと待つアル！いくらニコ中やゴリラがいるあの税金泥棒野郎でもそれは…」

「そうですよ！！あの人達は見かけはアレですが幕府の犬ともあるうお方ですよ！そんなことは…！」

「いや…真選組局長、真選組副長などが関係しているのではなく…

どうもその隊長等などが関係しているという噂が…」

浮かぶ名前……一番最初に頭に浮かんだ名前……

(まさかっ…サド!) (沖田さんっ…)

二人は冷汗をかく―

「で……

ですがこれはれっきとした噂です! テレビではまだ犯人の特徴は確定していませんと言っています。」

「じゃあ…警察に言えねえ理由^{ワケ}は、幕府の犬共が殺ったなど口を吐けば、ただ事では済まねえ…。ましてやアンタがこの街の庶民を狙う何者かに標的にされやすくなるとの理由で俺達に頼んだ……っ」と

「お恥ずかしながら…」

「だが……こっちもビジネスだ。やすやすと人の命使ってまでその犯人^{たわけ}をf i n e d o u tしろとなると

報酬は高けえーぞ!」

フッー

「こんなことあろうかと」

パチンっ！ー

男は指を鳴らすー

ガラッー！

押し入れから全身黒タイツをはいた男二人ほど出て来男の後ろに立つ！

「ちょっと待てー！ー！

人ん家からなんで全身黒タイツはいたやつ出てくんだよ！ー！此処はドラ○もんの世界じゃねえんだよ！ー！四次元ポケットから何でも出て来るレベルのアニメじゃねえんだよ！ー！ー！」

新八は、全身黒タイツの男達に指をビシッと指しながら口を大きく開き言葉を吐く。

男は全身黒タイツはいた男達からジュラルミンケースを受け取る。

「まさか…」

三人は唾をゴクツと飲む―

まるで、高級品を前にして落ち着きを抑えるのに精一杯の子供のよう―

「ご苦労…」

お前達は帰れ…。」頭を深く下げ、すたすたと歩き玄関の戸口を開け出ていった。

「おいしいい！！だったら最初押し入れから出て来た意味ねえじやねーかよ！庶民一般的に玄関から入って玄関から帰れえええ！！」

新八は玄関に体を向け口が裂けるほど開け言葉を投げ捨てた―

「銀さん…。どう思います？」

「ではよろしく！！」

「こちらこそっ！！」

二人は手を交じらわせ何らかの契約を結んでいた―。

「ちよつと待てえええ!! 僕がツツコンでる空白の何秒間に何があった―!!」

その何秒間前―

そのジュラルミンケースを開けた途端、辺り一面が一瞬金色に煌めいた―。

「あ…あの…金で釣るってのはどうかと思ったのですがこれ…

1000万です…どうでしょう…?」

ガシッ―

「よろしくお願いします!」 銀時は、男の手を両手で握る―。

「こちらこそっ!」

—以上解説—

「ではよろしく願いします！！今日の夜にまたお伺いしますので
では……」

深くお辞儀をし、
万事屋を後にした。

「ぎっ銀さん……………」
「だっ大丈夫なんですか…？あんな依頼受けて……………」

銀時等が食べたお菓子の袋　湯呑みを片付けながら
新八は問う。

「大丈夫だ。それに良く見てみろこれだけの大金だ
！！」

「こんなチャンス滅多にねえ……」
「でっでも……。これだけの金があるんだったら服なんていくつも買
えるはずなのに……。なににあんなボロボロの服……」

変なお金じゃなきゃ良いんですが……………」

ーピンポン

「あっ！高梨さんじゃないですか…？忘れ物でもしたのかな…？？」

「ったく…。はいーい今出まーす！」

ーガラッ

「なんか忘れ物…」

パチッ

パチッ…

瞬きをする―。

目が合う。

前に立っているのは高梨という男ではなかった。

黒髪ストレートな長髪をした男は腕を組み、鼻を高くして銀時の顔を見るなり

「よお……銀時久しぶりだな！」

「ヅラ……………」 かつて

攘夷戦争で共に戦った

銀時の旧友 桂小太郎

それが彼のことを言う。

お金の使い道はよく考えてから使え！（後書き）

改めて思った！！！！

銀魂ってサイコーω〇b

コンビニの卵って意外に高くないっ!?

バタンッ!!

銀時はすぐに扉を閉じた

ピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポン
ポン

扉を開けようと必死に攻める者と扉を必死に開けまいと抵抗する者の壮絶なバトルが玄関で繰り広げられていた。

家中には、インターホンの音が響き渡り

新八と神楽も少しずつ

苛立ちを感じてきた頃

銀時は我慢の玄関に達し

ついに

「うるせえええ!!!!!!」

ガラッ!と扉を乱暴に開け蹴りを一杯入れる――

「んだよ!!!!!!何回もインターホン鳴らしやがって!!てめえクレマーか!!!!!!俺に何かクレーム付けることあんのかコノヤロー!!」

「お前に……話があってきたんだ……!マブダチ……」

「てめえーとダチになった覚えはねええええ!!」

再び銀時の蹴りをくらい、「ヴブエ!!」と声を漏らす。

「ちっ…違うっ!!クレームでもエリザベスが居なくなったとかフミ子がふしだらとかではないっ!!!!!!お前も知ってるだろっ……!!」

「連続庶民殺人事件」

のことを！」

「あっ……まあな……！」

それと俺にどういう接点があるんだ？」

「こんなところで立ち話もなんだ……。中に入らせてもらうぞ。ヴッ
プッ！」

鼻からドバドバ出て来る血を手で押さえながら
銀時の横を通り過ぎ

中へと入る……。廊下にはポタ……。ポタと
紅い点がちらほらと見えた。

とりあえず新八は湯呑みにお茶を注ぎ、銀時、桂の前に湯呑みをコトツと置く。

「リーダーと新八君。悪いが少し二人だけで話たいのだが…。」

桂は真剣な眼差しで新八等に言う。

「分かりました」

「分かったアル」

そう言うのと、二人は万事屋を出て何処かへ歩いていった。

「んで。俺に何の？」

「ズズッ…。んあー」

やはりお茶というのは一番上手いな…！」

微笑みながら

湯呑みを置くー

「では本題に入るとしよう

銀時、さっきも聞いたとおりお前「連続庶民殺人事件」知ってい

るな？」 「ああさっきも言ったとおりだ。」

「まさかとは思うが、変な依頼など受けもってなからうな…？」

「変な依頼？」

銀時は片眉を少し上にあげる

「ああ…。俺の部下から仕入れた確かな情報なのだが

どうやらその事件で殺られてる奴ら全員、
その依頼をしたされた者ばかりらしい…」

「したされた者…？
そいつら密売人かなんかか？」

「いや…密売人ともあろうがただの一般人らしい…

表向き…ではな」

「！」「表向きでは、ただそこらで家などを回り売り物を売り売りしてる奴らしい。

だがその中の多くはある組織に入り、何らかの陰謀を目論んで夜な夜な動き回っているらしい……。

まっ攘夷志士との関係…ましてやこの街への害を加えるような真似はしないらしいがな…

心配するな…。」

そう言い終わると、
近くにあった煎餅をひょいっと掴みバリバリツ！と音をたてながら
口に頬張る―

「んで…そいつらの陰謀って一体何なんだ…？」

「……しゃあーな。びゅかから聞いたきよとはここみやでだ……。
モグモグと

口に頬張り膨れ上がった顔を一瞬にして元の顔に戻す―。

「だが一つ疑問に思うことがあってな……。…」

「?」

「さっきも言ったとおり…

奴らはただの物売り屋…。物を売り、その得た金で家族を養って生きていく者達だ。」

「?……………」

それがどうし…?」

「だったら何故……

死ぬ必要がある…?」

「! !」

「それも物売り屋の奴だけではない。それを買った者までもだ…。もっと例えるならばスーパ―の店員とその客が次々殺されていると言ったほうが早いかな?」

「物売り屋と名を名乗りながら何か薬を売ってるってのはありえないのか」

「ああ…それは絶対無い。俺の部下が実際そこに潜入したらしいのだが、薬らしき物は一つもなかったらしい。ただの調度品などが置いてあったらしい」

本当にただの物売り屋らしいのだが…。」

腕を組みウン…。
難しい顔をする。

「まあ話はこんなところだ。お前もせいぜい気をつけろよ。お前は金の為ならどんな依頼も受け持つような軽い男だ。忠告はした…。とにかく物売り屋が依頼に来た…。もしくは物を売りに来たなどがあつたら直ぐさま断れ！貴様にまで死なれては困るからな。良いな？」

「ああ…。分かってらあ…」

そう言うと、銀時は脚の付近に置いてあつたジュラルミンケースをツラ：桂に見つからないよう足でスツと退かした―。

く30分くらい経った頃

「では、俺はそろそろ帰るとしよう…。

銀時、リーダーと眼鏡君にすまないとお伝え願う…。」

「ああ…分かった。」

「じゅあな……………」

「…………じゃない!!」

「一つ言いそびれたことがあった!」

階段を下りる寸前桂は何か思い出したらしく再び銀時の前に姿を現す――

「その物売り屋が裏で何かを企てているその組織の名なんだが……………」

琲瑠袈^{べるか}

という組織らしい…」

「琲瑠袈…？組織の名というより人名みたいだな…」

「確かに…。まあもう一度だけ言う。せいぜい気をつけろ。二度目のじゃあな…」

しばらく桂の後ろ姿を見ていたが、その姿も夕日の照る方向へと消えていった。

「琲瑠袈……………ねえ…。」

そう独り言を呟く、銀時も万事屋内へと姿を消す。

誰もいなくなった万事屋内を一人歩く銀時、
それとギシ…ギシ…と軋む音をたてながら廊下を進み桂とツーマン
で話してた
部屋へと入る。

その部屋はあの時とは全く違う異様な空気が銀時の回りを漂う。

その空気を壊すかのようにその部屋へずかずかと入りジュラルミン
ケースへと近付き、ケースを開ける――

「依頼ねえ……………」

(変な依頼受けてないだろうな……?)

どうやらこの事件で殺されている奴全員その依頼をしたされた奴ばかりらしい…。

気をつけろ……。

お前にまで死なれては困るからな………)

「まさか………な。」

ジュラルミンケースをパタンと閉め

「そろそろあいつらも帰ってくる頃か……………」
願う者
仇討ちを

依頼を受けた 変わりに

大金を手にした者

それは

幸運を齎す鴉の声か

はたまた

不幸の音を鳴らす鈴虫の呼び声か！。

コンビニの卵って意外に高くないっ!?(後書き)

銀魂蓮蓬篇めっちゃ面白い≧≡≡ω≦≡!まじフミ子やべえーW
W

牛乳飲んだら背伸びるとか言うけどあれは嘘だからね！

その晩――

神楽・新八は7・00ぐらいに帰宅し　早めの夕ご飯を済ませ

銀時達はいつものたわいのない話をして時間を潰してる間に時刻は
10・00を過ぎた。

――ピンポン

一つのインターホンの音が万事屋内に響き渡り

銀時等はたわいのない話をすぐに切り上げ、

定春の頭をわしゃわしゃと撫で「留守を頼む…」と言うと定春も銀時等の現状を理解したらしく

「ワンッ!」と一つ鳴く。

定春に留守を任し

三人と依頼人は

万事屋銀ちゃんを後にした。歩いて10分はたっただろうか？

高梨という男の後ろをついていき目的地へと足を進める。横目でちらつと見ると回りの家々の部屋の電気はぼちぼちと消え、明かりが付いている部屋はごくわずかほどこしかなかった。

四人は気を使っているのか一言も話さず暗闇の中黙々と歩き続ける――

憂一

口に出した事と言えば

「まだか…」

「あと少しです。」

それ以降、地面をザッザッ…と撫でるように歩く音がテンポ良く闇とマッチしていた。

しばらくすると

「あそこが……。」

高梨は路地の真ん中をスッと指差す――

「私の家族全員が……殺された所です……。」

話に寄れば、高梨の家族は父、母、娘6歳、兄、高梨の五人家族らしい……。だがこの事件に巻き込まれ、高梨以外全員殺された……とのこと……。

「そんな……。それも家族全員だなんて……。酷すぎる……。」

「本当アル……。この事件の犯人……。人散々殺して何が楽しいアルつ
！！人殺して強くなるとでも思っ……。」

神楽はハッ！と頭にある人物の面影を思い浮かべた。

「兄貴……………」

そう小さな声で呟く。

「…すみません皆さん……。私が仕事依頼したから
皆さんお寒い中此処まで来てくださったのにどうでもいい話してしま
って……。」

「いえいえどうでもいい話なんてとんでもありません!!」

「私達が見つけてやるアル!そしたらメツタ斬りにしてやるアル!
!!」

「本当……」

ありがとうございます!!」

「んで……」

その犯人とやらが出て来る目星とか付いてるのか？」

銀時は鼻をグリグリとほじくりながら高梨に聞く。

「あっはいっ…確か此処から半径4?以内で事件が多発していると聞いています。」

「半径4?だあー?てことは直径8?の中から一人振り絞って探せって言うのか?んなの」志村けんの鼻かんだティッシュを探すようなも……

「キヤアアアアアアア!?!?!」

「!?!?!?!」

突然、女の悲鳴が暗闇の中から聞こえた。その声はそう遠くはなく、すぐ近くだと四人は思い、一目散にその場所へ駆ける。

「ていうか志村けんの鼻かんだティッシュより軽く見つけたんですけどー！！！！！！」

銀時の吠え声に誰も耳を傾けず、銀時除く三人は息を少し上げながら、真っ暗闇な闇を駆ける――

勿論　銀時もだか――

一人加えてっ……

四人は死角に差し掛かる時に急ブレーキを

足底にかける――。

「なっ！…これは…。」目に止まった『現実』
という名の現実…。

暗闇の中でも良く見えた

泣き崩れている着物姿の女

そして往路には

血まみれの

上半身だけがその場所には残っていた。

ちらっと視線を女がいる場所とは反対側を見る

的中した――。

そこには血まみれの下半身が斬られた所からドクドクと赤い液体を
垂らしながら倒れていた――

「アッ…アンタ！一体何が……。」

高梨は女に震えた声で問う

「アッ……アア……私は……何もしてない……私はただ……」 一歩……一歩こちらに近寄って来る。両手を頭の脇に立てながら……。

「私は……死にたくないっ！！こんなっ……
こんなところで死に……。」

ズシャアアアアア―

女の背中から激しく血が噴き出す。

そのまま女は頭の脇に手を立てたまま顔面から地面へドサツ！と倒れ込む―。

女が倒れ込んだ背後に立っていた者は女から噴き出た血を体中に浴びた。

血で染まっけていてもそれが何者かは深く考えずともすぐに分かった。

高梨から聞いていたとおりの真選組隊長服を着用していた。

真選組制服は黒というより鮮血な朱に染められた灰色のストレートヘアーの女。あのコンビニ事件の時は、私服なのかそれとも変装であんなJKの格好をしていたのか分からないが、真選組隊長の制服を着ている姿はこれが初めてだ。

女に向けた虚ろな瞳はしばらくするとやがて銀時等へと目を向けた。

「まっ……まさ……か」

驚愕のあまり誰も

声に出さなかったが

とうとう新八が先頭切って口を開いた。

「そん……………な

どう……………して…

その刀の先からは紅黒い液が雫のように……………

ポタリ……………ポタリと

同じテンポで墮ちる…。

「新羅さんが……………」

牛乳飲んだら背伸びるとか言うけどあれは嘘だからね！（後書き）

真選組四番隊隊長

連沢新羅は

血だらけの刀を

銀時達に向け

「コンビニ以来ですね…」

優しく

でも何処か

あの時とは違った

笑みを見せながら

そう小さく口を開いた―

そしてただの『夜』

という

短い時は終わり

今宵の本当の『夜』の
幕開けとなる――

笑顔には裏と表の両方がある

「新羅さ…ん…

どうしてっ!!」

「どうして貴方がっ!!」

「私がどうかした…?」

新羅は薄い笑みでただただ銀時等に目をやる

「どうかしたって…!!」

新羅さんっ!

貴方 真選組隊長でしょ!!

警察ともあろうお方がなんで……なんで……っ

説明してくださいよ!!

新羅さ……」

一瞬

新八の周りだけに

生温い風が吹く。

新八は、自分の隣にいる人物に恐怖感を覚えゆっくりと瞳を横に流す。

「だあゝから……

私がどうかしたって聞けるの……?。

それに……」

耳元に口を近づけ

優しく囁く――

「私………あんまり自分の名前を一度に
何度もしつこく言う男

嫌いよ………」

その瞬間、新八の身に何が起きたかは銀時等にも新八自身も分からない。

ただ新八は、新羅の横で勢いよく倒れた――。

その横で倒れた新八を新羅は笑みを見せながら睨みつけ

「良い夢を……。」と言った

「新八っ！！！」

銀時は新八の元へ駆け付けようと右足を一步前に出す。

だがそれに気づいた新羅は背中を銀時等に向けていたがすぐに向きを変えた。

「てめえっ……！！！」銀時は鋭い目つきで新羅を睨みつける。

「ごめんなさい…別に新八さんを傷つけようとは思ってなかったんだけど…
つい…

でも安心して…

ただ気絶してるだけ…
直に目が覚めるわよ…」

「そういう問題じゃないアル!!!」

神楽は新羅に向け声のボリュームを上げた。

「新羅：お前何やってるアルか!!! お前はこの街：この歌舞伎町を護る為に真選組に入ったんじゃないアルか!?!? なのになんで罪の無い人間を殺してるアルか!!!!」

「罪の無い人間……?」

「そうアル!!!」

「ハハッ…」

アハハハハハハハハハ…!!!」 急に新羅は腹を抑えながら笑い出す。

「なっ何がおかしいアル！」

「はーあ……」

そっかあーいくらこの街のなんでも屋でもそこまでの情報は知れ渡ってないんだあー！」

「情報？」

「知ってる？表向きでは物売り屋とかで商売しているけど、裏ではある組織に入り何らかの陰謀を企てているっていう集団……」

「いや知っててなおその男の話に乗ったか……。」

「はっ？てめえ何言ってる……」

「まだ分からないの……？
アンタの隣にいる男

琲瑠袈 の組織の一人だって言ってるの……！」

「!!!!!!」

「ぎっ…銀ちゃん、琲瑠袈って何アル…か」

銀時の浴衣の裾を掴み問う神楽に対し銀時は「少し黙っている…」とだけを告げ隣にただ無言で佇んでいる高梨の方に身体を向ける。

「お前っ…本当に琲瑠袈の…」

「……………」

「てめえ聞いてんのか!!」

「……………」

それでも

高梨は口を開こうとはしない。ただ前だけを見つづけ銀時の方に目を向けようとしない。

「黙ってねえーで何か言ったらどう…」

「時間の無駄でしたね……」

「!!!!」

新羅へ身体を

向けた!…が既に遅し

新羅は一瞬にして銀時等の前に立ちはだかり

「邪魔です…。」その言葉を聞いた瞬間、彼女からは殺気を感じとった。その目も人間のようではなく……

まるで

鬼のような――

そう思ってる間に

銀時と神楽は新羅からどんどん遠く離れていき

約20?ほどの所で地面に

引きずりながら止まった。

腹からは鋭い痛みが身体中を走り、その時新羅に

蹴り飛ばされた

という事に気づいた。

隣で神楽は苦しそうに
腹を抑えながら疼くまっていた。

「おいっ!! 神楽しっかりしろっ! 神楽っ!」

「ぎっ…銀ち…ゃん

新羅…は新…羅はどうし…て……………」

「神楽っ 神楽!!」 神楽もそこでプツンッ!と
電気が切れたように
意識が途絶えた。

神楽が抑えていた
腹を見ると紅黒い筋が
ツーツと出来ていた。

多分それは新羅に蹴られた時、新羅の履いていたブーツのヒール部
分が神楽の腹に運悪く刺さったのであろう。

銀時は神楽を抱き、
「少し我慢してろ……」

そう言いまた新羅の方を向く。

「やっと二人だけの空間になったわね…。琲瑠袈の将官さん……。」

「新羅を前にして、足をガクガクと震え上げている高梨
そんな事知らないばかりに新羅は高梨を冷たく殺気が発つ目つきを
し新羅とは思えない程低い声で

「アンタには色々聞きたい事があるからな…。」
そして手を伸ばす――

――が言葉を聞き

高梨はボロボロの

袖の中から

カチャツ――

拳銃の引き金を引き

バァンツ！！――

発砲した―。

「何こういうの運命って言うのかしら…？」

「！！！！」

「コンビニ事件の時もそうよ！何発も撃発砲されるわ今も発砲されるし……。」

ハア―と一つため息を零しやれやれ…と首を左右に動かす。

この時点でお分かりだろう。新羅は銃弾をひょいっと軽く首を横に傾けかわした。彼女には銃弾が効かないのかただたんまぐれなのかは知らない。「こうも銃弾バンバンバンやられるとねえ…」

興が冷めるってモンよ…」 バシンッ！！！！

右手を刀のように器用に使い高梨の持っている

拳銃に一瞬のことで銃口をスパッ！と切り捨て地へと追いやる。

銃口がなくなった…。それはいわゆる成す術がなくなったとの同然。高梨はその銃を地面にたたき落としその場を立ち去ろうとした。

だがそんな隙を空けようとはさせない新羅は高梨の足に自分の足を駆けさせ地に誘う。俯せ状態になった高梨の手首を持ち片腕を空中に誘う。

「この空間から逃げ出せると思った…？馬鹿ね…」

高梨から新羅の顔を見ることがまず不可能。なんせ片足を高梨の首につけ、無力体制をとらせられている為。

「じゃあ…変な茶番劇が終わったことだし。そろそろ始めるとしようか。」

「…時間も無いことだから、早めに終わらせるわね。
私が今からいくつか質問をするからアンタはその質問に問われた事だけを答えればいい…ねっ簡単でしょ！」

でも…

アンタに与えられた

解答タイムは一問につき約20秒。早く答えないと……」

グググッ…。

空中へと誘われた片腕を曲がってはいけない方向に少し動かす。

「アッ！グッヴウ…！」

高梨は喘ぎ声を出す。そして高梨には今の現状は分からない。だが腕に

もの凄い痛みが走り、血液の循環が早まる。「まあ自分の腕が壊れたくなかったらグズグズしてる暇はない…。そういう事…！」

クスッと笑い、この状況を愉しんでるかのようになり、下に居る人間を人間と思わない目で見える。

「分かった？」

高梨は縦に顔を振る。

腕を元の指定地に戻す。

「…あっ！…銀時貴方も一応関係のある話だからよく耳澄ませておいてね…。」

「あっ……ああ……」

「んじゃあ始めましょう！」

笑顔には裏と表の両方がある（後書き）

「それじゃあ一問目…」

「アンタは……」

……

……

したの……？」

風が吹く…。

その風は

その場にいた者に教えた

世界は不条理で
不公平だということを…。

人の質問になんでも返答できると思うなよ!!

「はっ……?」

風の囁りが新羅の質問に対し反抗した為、新羅が今何を口に出したのか分からず　ただ「はっ?」と声を漏らした。

「聞こえなかった…? これは銀時…貴方に聞いてるのよ…。

もう一度だけ言うわ……。この男になんて依頼されたの…?」

「依頼…?」

「そう…貴方は確かにこの男に何か依頼されたはずよ。それはなに…?」

契約の話?

「巻きますか?」　「巻きませんか?」　と聞かれた…? それとも人形を買…」

「てめえ何言って…」

「?…違うの?」

違うも何も新羅　が言った言葉に対し銀時は
思考回路が狂う。

（人形……？巻きますか？巻きませんか？）

「じゃあ何て依頼されたの？」

「連続庶民殺人事件」の犯人に家族が殺された……だからその犯人に仇を打つ……。そんな感じの依頼だ……。んでその事件やまの犯人とやらがおめえだったって訳だ。」

そう説明している時に高梨の肩がぴくっと反応した

「家族が殺された……？」

成る程……。」

グッ！と高梨の髪を上へ持ち顔を新羅の方に向かせた。

「アンタも考えたもんだね……。琲瑠袈の存在が表に割れないが
為に自分の家族を盾にした……か。」

「？」

「銀時…。こいつは家族なんて殺されてない…。まして殺してなんかいない…。それに

私は琲瑠袈の連中だけしか手を出していない。

多分こいつは自分の仲間が次々殺られている事は口を封じ、代わりにこいつの

家族が殺された。家族の為にその仇を討ちたいとこのことで貴方達を使った。そういうことでしょ？

高梨…さん。」

「ってあっ…。！それとさあ…二問目の質問に入るんだけどさあ…。琲瑠袈の将官さん等……

あんたら琲瑠袈が大挙し大規模なテロ活動を行っているって情報があるんだけど…」

「……………」

「ねえ…どうなの…？」

高梨は新羅の目を覗きこんでいるだけで口を開こうとしない。

「ああ……じゃあいいや。この話は最後の方でもう一度聞こう
としましょうか？」

本題といきましょう…。

これは私達自身に関係していることでもあるから……」

（私達自身……？）

「ねえ教えて…

貴方達はテロ活動と共に

もう一つ何か活動してるわよね…。

それは……何？」

「ヴッ……!!」

「これはタイムリミット制限あるわよ……。早く答えて。」

腕を曲がってはいけない方向へと少し動かす。

「じゃあさ……私がキーワード言うからそれに伴い言ってくれる……？」

「……ああ……知ってるさ……お前達の……正体を……な」

「何……？」

とうとう高梨が口を動かす。

「お前達……、副隊長の……正体が……。」

「……」

「……副隊長…翠羽とか言ったか……。あいつは……」

「カウントダウン10秒前……9……」

「あの女…は…

人間なんかじゃな……い」

「早く……8」

「アリス…になれ…

なかった…ただ…の」

「…7……」

「ツジャンク…

（壊れた娘）」

バギッ—！！！！

鈍い音—すなわち高梨の腕は曲がってはいけない方向へと折れ曲がった—。

「アッ—アッ……」

「ごめんなさい…まだ
時間あったのにねっ…。骨逝っちゃったねアハハハ！！！」

「うああああああああ！！！！！」

高梨の叫声―

そして新羅の狂喜な声が
夜の歌舞伎町中に響き渡る。

「てんめえ…！！！」

銀時は気絶してぴくりとも動かない神楽を地面に静かに置き、高梨の元へ駆けようと体勢を整え一歩踏み出す。

が―真っ正面に佇む二人の何者かに真剣の先とクナイの先を首の筋に向けられた。

「此处は腹を括って黙って見ててくれないますか…？」

真剣を片手に持つは

真選組四番隊副隊長

奥平翠羽

「君は（神楽）その娘とあの眼鏡君の心配したほうがいいよ…。
あの男より…ね」
クナイを持つは

翠羽の妹 奥平蒼琉

「くッ！！！」

言われるがまま、銀時は高梨の元へ行く足を止め、
「わ
あつたよ…」

そう告げると同時に
二人も刃を降ろした。

「さあ……新羅はどうするんだろうね…。あの男のこと…
……。」

「へえ…

そんな余計な情報まで知ってるんだ…。てことは琲瑠袈内部でもそのことを知っていない者はいない…そういうことね……。」「ま
あ……琲瑠袈本部はあんたに聞いてもどうせそんな安々と口を割る人だとは思ってないから……。」

—チャキツ！

鞘から刀を月夜に照らしながら抜き高梨の首元に近づける

「あんたはもう用済み。

死んでいった仲間によりしく頼むわあ―。

次生まれてくる時は

道間違えるなよって…」

首元に近づけた刀の先を脈に留まらせ思いきり引き抜こうとした。

が しかし

ピピピピピピ―

一つの着信音になる。

まるでこの状況を

みさからって鳴らしたかのように―。

新羅は刀を持つ手は首

元から離さず変わりの手―

高梨の折れた

ぶらんぶらんな手を解きそちら側の手で携帯を取る。

その瞬間高梨は逃げようと試みるが、相変わらず片足は高梨から

離れる気配がせず頭をしつかり踏み付け逃がさんと言わんばかりに力を加えた。

「はいー連沢です。」

「……………ええ…ええ……………わかった。
こつちも手柄は抑えた。こちらにも援護をー。」

ピッー

電源を切り 携帯をパタンと閉じ、高梨の方に目を下に向けた。

「高梨……。祝、なことにあんたら琲瑠袈のアジト私の部隊が発見したらしいわよ…。」 「!!!!!!」 内容に寄れば捕縛した

琲瑠袈のある一人の男を強制的に問い詰めたらしいのだが そしたら
すぐに洗いざらいに吐いたとのこと。

「なんだか皆お縄に着いちゃったらしいわよ…。残念ね…。私がアジトごと琲瑠袈内部全員肉塊にしようと思ったのにほんとにざあーんねん…。」

ハァーとため息を零し
眉をしたに垂らす。

「皆縄に着いちゃったからなあ。アンタだけ殺してもねえ……。うん…

非常に残念だけどあんたも牢獄入ってもらうわ！アンタも運良かったわね。腕一本だけで済んだことだし」ハハッ！と

口では笑っていたが

目は笑っていなかった…。

「まあさつき援護頼むとか先に言っちゃったし今更悔やんでも駄目か…。」

刀を首元から外し
鞘へ刀を戻す。

ヴーン
ーヴーン！

「あっ！きたきた！」

振り向くと

隊士の4、5人が車内からおりてくる。その姿を確認したあと新羅は踏み付けている足を退かせ変わりに両手で高梨を押さえた。

「隊長！！ただいま

局長らが琲瑠袈の連中を縄に着かせたとの御連絡が入りました。」

「ご苦労……。私もたった今琲瑠袈の組織の一人を取り押さえたとところ。すぐにこの男を局長の所まで。」

（今さっき…？何嘘こいてんだコイツ……。）

「それと……。あそこに散らばっている死体の撤去作業も合わせてよろしく！」

「はっ！！」

隊士の二人は高梨を連行するが故高梨の腕を肩に回し車内へと連れていく。その内の三人は新羅があの時見境なく斬った女の真っ二つになった塊の撤去作業に移っている。

隊士達には20？先の銀時の姿は闇にカムフラージュされており気づかれてはいなかった。

「いつまで座ってんの？

早くこっちに……」

「！」後ろを振り向くと

いつのまにか新羅は新八を担ぎ暗い夜道を歩いていた。

「今日は迷惑をかけた。送っていくわよ……。」

暗い公道の真ん中には

不自然と車が一台明かりを照らし止まっていた。

「それに……」

まだ話したいこともあるからね……」

そう言うと、後部座席のドアに手をかけ開けると、
「どうぞ……」

と薄い笑みで車内に向かい入れる。

銀時は無言のまま、

神楽を担ぎ車内へと入っていく。その後ろに続き新羅も車内に入り、

パターン―と近所迷惑にならないように静かにドアを閉めた。

その車は

万事屋銀ちゃん宅へ

目的地へと 静かに

車を走らせた―。

人の質問になんでも返答できると思うなよ!! (後書き)

テスト終わったのでこれからなんとか投稿ジャンジャンできるようになりました!! かも…?

車の中では騒いでた方が酔いにくい

車を走らせ

約6分―

車内は 車に乗った当初から息苦しいふいんきに見回れていた。

一言も口を聞かず

後部座席に乗っている

両者互いの窓の外を

夜中で何も見えない

夜の道をじーっと

見つめていた。

聞こえるのは

車の静かなエンジン音―

両者の真ん中で肩を近づけスウー・スウーと眠る神楽と新八の寝息だけ―

「怒ってる？」

先に口を開いたのは

新羅―。

暗い夜の小路を見つめながら銀時に問う。

「……………」

「まあ連れを傷つけられたんだもの怒らないはずないわよね……………」

「……………」

またしばらくの間沈黙の時が始まる。

「……なあ」

かと思われたが

銀時は次に口を開く――。

「何？」

「奥平達は……？」

「翠羽達のこと？……さあね……もうアジトにいったんじゃない？」

「……そうか……」

「もっと違う事聞くかと思ってた……。」

「あ……？」

「気にならないの……？なんで私がテレビで報道されてまで事件を発展させたか。とか……。」

銀時は少し肩に力をいれると一気に肩の力を抜く。

「んなこと聞いたって…

俺達には何も得することなんてねえしな……。」

そんな返答に一瞬目を丸くした。

「へえ……存外この街にもそんな気の利く人もいるのね……。

じゃあさ……

これだったら気になったんじゃない……？

――契約の話

――巻きますか？

巻きませんか？

っていうこと……。」

「!!!!!!」

視線を銀時にちらっと向けると銀時はぴくっと肩を鳴らす。

「まあ……いくらなんでもあんな質問聞いたら嘸疑問湧かない人は少ないだろうね……。」

窓から視線を外し、

正面に身体を向き直すと腕と脚を組む。

「てめえ……。」

一体何がしてえ……。」

この街に……何しに来た。」

銀時も窓から視線を外し 両者ようやく
面と面を合わせた。

銀時の真剣な眼差しを
しばらく見るとニヤツ―と口を横に広げる。

スツ―と銀時の後ろを
指を差す―。

「着いたわよ―。万事屋銀ちゃん宅に……。」

「!」

後ろを振り向くと
いつのまにか

「万事屋銀ちゃん」

と書かれた看板のすぐ下の公道に 車が止まっていた。

「両方はキツイでしょ

…一人持つ…?」

「いい……。」

即答し、神楽と新八を自分の肩に担ぎ、外へ出る。

「そう……。
気をつけてね……。」

「……………」

無言のまま礼を言わず、階段を一段上がった途端

「明日の2時、
てに〜ずで待ってるわ。勿論その二人も連れてきてね……。明日全て話すわ。」

契約の話も…人形の話も…

そして

薔薇乙女

（ローゼンメイデン）のことも…」

「?…ローゼンメ…」

「翠羽と蒼琉の自己紹介を合わせてね…！」

銀時の言葉を掻き消すように言った。そして神楽へと視線を動かす。

「神楽の容態は明日になれば治ってるはずよ！なんせ夜兎だから治癒力も早いだろうしね…。」 「!!!!!!っ…てめえなんでそ…!!!!」

人差し指を唇の前にたてシートと銀時の声を消す。

「もう夜中の3時よ！でかい声出さないで！近所迷惑でしょ！

詳しい事は明日教えるから今日はこれで…

さようなら…」

笑みを零しながら

手を二往復振ると

パタン！とドアを閉め

車は真っ暗闇の行路を

進んで行きやがて姿形が見えなくなった。

「あの女…一体…」

そうぼつりと呟くと

階段を上がっていき、

銀時等も部屋の中へ入る。

「よろしいのですか…。あんな男に―契約の話などして…。」
運転手はバックミラーから新羅の顔を伺う―。

「言わざる終えないじゃない―。あんな光景見せちゃったんだし…。」

後部座席に腕、脚を組み座り黒一色に染まる
窓の外を見つめながら言う

「ですが……ローゼンメイデンはともかくまさか貴方の……。」

「冗談よして……。そこまで私もべらべら口叩く言う女じゃないわよ。」

「なら良いのですが……程度というものを知ったほうがよろしいかと……。」

「分かってる……。」

「なら何故そこまであの男に執着心を持っておられ……。」

「大物が釣れたんだよ……。」

「ほほお……大物とは？」

「あの男……。」

白夜叉よ……。」

バックミラーの中に写る運転手を見ると、運転手の顔つきが変わる。

「!!!! 白夜叉…。」

何処にいるかと思われましたがまさかこの歌舞伎町（街）に。
では計画は……………」

「実行する……………」

必ずこの街にいるはずだから…」

「健闘を祈っております。」

「まあ…」

早くアジトに向かって…。土方に罵声浴びせられるの嫌だから…。」

「御意……………」

―異様に紅く染まる月と共に

数ある謎に満ちたまま…

今日という長い一日は

もう…

返ってほこない…。

車の中では騒いでた方が酔いにくい（後書き）

次はいきなり

てにーずに入った新羅達と銀時等の会話になります！

女の涙に男は弱い Part 1

「あのー……」

ええつと…？

ごっご注文…は？。」

「ええつ…とね……」

「ジャンボエビフライ定食」「スペシャルジャンボパフェ」に

「ジャンボ坦々麺」

「ジャンボステーキセット」「ジャンボクリームパスタ」「ジャン

ボカレーライス激辛味」「ジャンボポークカツ」を下さい！」

「あ……はい…」

かしこ…まりました…。」

店員は目を泳がせながら注文書に次々メニューを書いていくと、
後ずさりをするように

去っていった。

そりゃそうだろう。

銀時等が座っているテーブルの上には食べ終わった何十皿もの皿が段々積まれておりその大半が銀時と神楽によって軽々と平らげられていた。

「ホントに適当に頼んじやったけど良いの？」

メニューリストをパタンと閉じると、目の前で皿にのつてあるタラコスパゲティ―

やらなんやらをまるで獣のように貪り食う銀時に聞く。

「ああ……！！！！じゃあんじゃあん注文ひろ……！！！！」

「ちよつと！銀さん！ジャンジャン！ってこれ

みんな新羅さんの奢りなんですよ！！自分が奢ってるみたいに言わないでくださいよ！！」

「眼鏡五月蠅いネ！

おみやえもさっさと食べるいヨロシ……！！新羅が良いって言うんだから

そりえで良いあるじゃないアルか……！！」

ガツガツ！と

カツ丼をブラックホール状態の腹へ入れていく。

「神楽ちゃんもだよ……！！少しは遠慮ってことも考え……」

「良いわよ……！！今日は

文字通り私の奢りだし！

思う存分食して……！！」

「よしっ!! 神楽!!」

今日はこいつの奢りだ!! 食べ放題!! 食えるだけ食ってその腹が悲鳴あげるまで食いまくれ!!」

「おうネ!!」

新八の注意を余所に二人の猛獣は再び皿の上の物に目掛けて口を開けた。

「ちょ……………」

新羅さん良いんですか? こんなに…。」

「良いわよ良いわよ! 昨日の件で貴方達には色々迷惑かけたし、こんなんで許してもらえるなんて思っていないけど、少しでも罪滅ぼしになればと思って…。」

新羅は少し顔を俯かせながら言う。だがしばらくして顔をあげると今度は新八に向け頭を下げる。

「本っ当に申し訳ありません! 昨日は琲瑠裂の件のコトもありあの男だけじゃなく新八さんにまで手を出してしまって…。」

昨日の件… 確かに昨日は災難な目にあつた。新羅に気絶させられ、何より気絶させられる瞬間に「嫌いよ」などと言われたのだから。

「いっ…いえいえ！そんな頭下げないでくださいよ！ささっ！頭上げて下さい！」

言われるがまま、新羅は頭を上げる。

「確かに昨日は色々災難な日でしたが、僕もう気にしてませんから！対外の事は一、二日で忘れてしまいますし！」

ニカッ！と白く輝る

歯を見せ笑うと

新羅も少し微笑む。

「本当にすみません…。」

「神楽っ！貴方には身体に傷を負わしてしまった！最悪の場合血管に穴が空く可能性も確率的に低くはなかった！本当にごめんなさい！！」

テーブルスレスレまで額を近づけ頭を下げる。

「んーいいいいよぉー！べえつに気、にしてな、いからぁー」

一方の神楽は、のんきに右手に巨大ファンクフルト、左手にローストビーフを口に頬張り、その半分が何

言っているのかは聞きとれなかったがとにかく

神楽は昨日のこと

なぁんも気にしていないようだ。

鶏も三歩歩けば忘れる…

とか言うが人間（夜兎）も

一日立てば忘れるものであるのだろうか…？

「で：でも神楽っ？貴方

お腹に私のヒール刺さった：」

「あれえだあったらみよう治ったアルよ！私」

夜兎族だから治癒力

ハンパあじゃないネっ！！！！」

フランクフルトを皿の上に不安定ながら置き、自分の腹を新羅に見せる…。

そこには、昨日のことが嘘だったかのように傷一つのないただの夜兎特色の透き通るような白い肌が見えた。「ちよっと神楽ちゃん！食事中に何してんの！レディーなんだしそれに他のお客さんにも見られ……………あれ？」

どうも珍しい。

いつもなら、子供連れの

親子やら、JKやらギャルやらメンズやら

少なくとも5席ほど埋まってるはずのてにゝずが妙な事に今日は銀時達だけの話し声しか聞こえないのだ。まるで貸し切り状態。

「いや貸し切ってたんだけど？」

「はっ？」

突然新羅が口挟む。

それに「はっ？」と言葉をこぼす。

「いやだから貸し切り状態じゃなくて貸し切ってたの！今日は！！！」

「ええええええ!!!!」　一同騒然! 驚く銀時!

だが銀時以外神楽と新八は席から立つ。

「ちよっ！貸し切りってマジのマジのアルか！！」

「本当にですか新羅さん！」

「ええ…マジのマジのマジだよ！」

ニコリと笑う。

「でっでも……どうやって此処の店……」

貸しきったんですか？

それに：

「…わざわざどうして？」

「フフフ…」

新八さんも鈍いわねえーそんな質問しなくても普通に考えれば分かる事じゃない？」

「えっ……？」

笑う顔とは裏腹、ゴゴゴっ！と背中から殺気が放つ。頭上にはどす黒いオーラが聳え立つ――

親指と人差し指を丸い輪を作り、さつきよりも無邪気に笑う。

「金よ……金よ……金よ……金よ……」

「金よ…」という二文字の言葉が銀時達の頭を木霊するかのよう過ぎる。

「「金あげるから此処貸し切りさせて」ってこの店の主人に頼んだらあっさり承諾してくれたのよ○○／いやぁ金の勢力って凄いわよね!! まるで人間が駒のように動くんだもの…。」

(何さりげにやべえ事言ってるのこいつ!! てかこの状況で顔文字使う意味あるのか?)

銀時の心の叫びはさておき新八はコホンっ! とわざと咳ばらいする。

「ええっと…まっ…まあ
とにかく新羅さんには億万長者って事ですかね…?
あははあ…。」

「億万長者なんて勿体ないお言葉。貸し切りに出した金は全て局長の銀行に入ってたお金を盗んできたものよー(笑笑) 手帳を鞆から取って口座番号適当に押して後は金を降ろすだけ…。ねっ!…簡単でしょう?」

「いや簡単でしょ!
って アンタ何やってんですか!! アンタそれもモノホンの詐欺でしょーがあああ!!」

新八の声は店内全域に響くだが周りからは冷たい視線を感じない。
そう今此処は貸し切りしてて人がいないからだ。

「詐欺なんてとんでもないとんでもない! 勿論局長に承諾得たわよ!

「お妙さんの働いてるキャバ嬢が今破綻の危機に陥ってるらしいですよ。キャバ嬢：いやお妙さんの為にも局長の口座に入ってるお金お妙さんに費やしてあげたらどうですか？」って言ったら、「お妙さんが居るからこそ我が命は今こうしてこの街に存在している」なんて言ったから
「じゃあ私がお妙さんに渡してくるから、手帳私に預けてくれませんか？」

はい成立！！！

そこからは貴方達のご想像にお任せしまあす！！」
ズズっーとホットコーヒーを啜ると、ハアっ！と一息つく。

「雑だけど大方こんなもんよ！理解出来たかしら？」

「理解ってもんじゃねえだろうがああ！！」

まあ近藤さんのことだから騙されるのは丸見えだけど、アンタただ金だまくらかして金巻き上げてるだけじゃねえかああ！！それが警察のすることですか！それで警察ですかっ！」

「警察だって生きるに故はこういう事も大切なのよ！人を騙して騙して生きる！それが人間ってもんじゃない？」

「全ての人間がそんな汚い人生歩むと思うなよ！！！！！！」

「まあまあ：局長には言わないでね！あの人今必死こいてお妙さんの為に金費やしている最中だからそのうちまた大金が手に入る日もそう遠くはないからねえ…」
目を輝かせながら窓の外の景色を伺う。

（駄目だ…この人と話してると自分の頭まで狂いそう…。）

新八一敗北を氣した。自分の頭を狂わせないために

「ていうか、新羅さん。

今日翠羽さん来るんじゃないかなかったですか？それとその友達みたいなー？」

「友達じゃなくて

翠羽の妹さん！そろそろ来ると思うわよ！

んまあ…あの娘達の事だから入り口から入って来るとは思わないけど…」

ボソツと独り言を言う。

だが新八等の耳に

はつきり聞こえた。

「おい…どういう事だ。入り口から入って来るとは思わないって…。」

銀時は食べるのをやめ、新羅の顔を見る。

新羅は苦笑いをし

「いや…だからそのまんまの意…。」

「遅くなったですうー。

はいこれお土…産…」

「…だから嫌だっけって言ったんだよ翠羽…。もう皆集まってると思うからって…。」

パチっ―目が合う。

パチっ―顔を斜め？の

二重ガラス窓の方に。

パチっ―あれ？おかしいな…。なんで…人間がガラス窓から…？あれ上から吊されている…？いやワイヤーなんて見当たらないし、第一風吹いてるのに身体揺れてないし…？

まっ…まさか…！！

「いっ…いやあのね！先に言おうとは思っただけど…言うタイミングが無くて…：…：ね。」

焦る新羅。

ドン引き顔の万事屋一家―

そして

「この娘達、1？くらいの鏡からなら何処からでも出入り出来るの…よ！」

翠羽ともう一人の女性、蒼琉が鏡の中から上半身だけがひよこつと出ていた。

「ぎゃああああああ…！！！！」

時計の針は午後3時
を回る。

楽しい楽しいおやつタイムは

絶叫の日和となったー。

女の涙に男は弱い

Part 1 (後書き)

銀) なあなあおい…

神) 何アルか…?

銀) 今回なんで主人公ほっぽいて眼鏡と連沢の会話が長いわけ? くらあー?

神) 確かにそうアル! なんで私あんな食い意地張らなきゃならないネ! もっと謎ディみたいなお嬢様風に食わせてもいいじゃないアルか!!

銀) いやお前は謎ディには向いてない。どうせならマツコ系でタラバガニを殻丸ごと食って後から口の中血の味になりーの蟹本店にクレームを言う方がお似合いだ!

神) てんめえ!!! 私を
一体なんだと思ってるアルかああああ!!!!!!

銀・亜麻音)

食べて寝て食べて寝て

う○こしてまた食べて寝る暇人女。

神) それはてめえらだろおがああああ!!

銀・亜麻音) ぎゅあああああああ……!!!!!!

※良い子はバランスの取れた生活をしよ………ね…

ーチーン…

新) あのお…僕は…？

女の涙に男は弱い Part 2

神楽 呆然…。

新八 啞然…。

銀時 失神…。

「ちよっ…銀時！大丈夫？口から泡吹いてる……てか魂半分出てる！…！」

新羅は開いた口から半分出ている魂を拳を魂に向けて無理矢理口の中に押し込む。

「ウップ！」

なんとか一命を取り留めた。白目から死んだ魚のような目に戻り、一応一安心？

「てか、翠羽達もいつまで鏡ん中から様子伺ってんのよ！さっさと降りてきなさい！」

「こっちへ来い」と手招きをする。

その様子を鏡の中から

伺ってた翠羽と蒼琉はこくりと頷くと、天使が舞い降りるかのよう
に鏡の中からスルツと出て 隣のテーブルに着地する

「ふうー間に合ったですう！あっこれお土産っ！適当に食べて！」

「それはさっき聞いたっ！てかちよつと待てええええ！…！ごまかそうだったってそうはいかんぞ！…！…！どういことですか！人間が窓から出て来るって！」

新八の鋭い言葉に翠羽と蒼琉は冷汗をかき、焦りながら

「い…いやいや何の事かなー？その窓開いてたじゃん？気付かなかったあ？私達あっちの方から大砲に

吹っ飛ばされて此処まで来たんです！ね…ねっ蒼琉！」

「そ…うそう！今歌舞伎町で主催している「大砲で何処まで飛べるか大会」やっているからねえ！僕達も一応参加してこうやってきたんだよー？」

「何処がああ！おもくそ窓のなかから上半身出てたでしょーがあああ！！」

「い…いや？だからそれは…」

「翠羽！蒼琉！」

もう良いわよ……

…全て…この人達に話すつもりだったから……。」

ガムシロップの蓋を器用に開けてホットコーヒーの中に入れるところーっと吸い込まれるようにコーヒーの中に入る。

「ちよっ！新羅！全て話すって何を……」

「おい…窓から出入り出来る事とその薔薇乙女とかいう奴と何か関係あるのか…？」

「……………えっ？」

キョトンとした開いた口が塞がらない翠羽。

「今……ローゼ……ンメイデン……って……」

「察しが良いじゃないの？そうよ……この娘達はローゼ……」

バツー！

「ちょっと！新羅！

ミーディアムでも何でも無い奴に何教えてるですか……！このぼんくら共ただのド素人ですよ！ド・素・人……！」

胸倉を掴み、前後に激しく振る……！それでも新羅は顔色一つ変えずに「ミーディアムになった人も全員素人でしょ？」

「だからって……」

「ちょっと待って下さい……！何なんですか……！さっきからローゼンメイデンとかミーディアムとか意味わからない発言ばかりして……！」

新八の言う通り、この小説を見ていただいてる方々も

「はっ？何ローゼンメイデンって？ミーディアムって何？ミュージアムの間違いじゃなくて？」

みたいな

疑問を抱いてる方々も多々おられることでしょう。ナイスだよ……！眼鏡っ……！

「そこ新八で良くないっ……！……！……！つか眼鏡の後に？つけるのやめてっ……！……！腹立つから……！」

ボソッ……

新八のツツコミなんて読者は興味ないんだよ。

さて次へGO↓

「あっ！そっか！

てか昨日あったことから話した方が話の辻合が繋がるかもね…。
あなたたち昨日は気絶してたから話の読みがわからないのも無理もないし…。」

「昨日…？」 「お教えしましょう…。昨日あったことを…全部。」

「そして…翠羽…。早くこの手を離しなさい…。」

新羅は昨日あったことを新八等が気絶した後にあった出来事を語り始めた。

琲瑠袈の存在―

高梨の本性・そして

本来の目的の事も…

「大体御理解頂けた…？結構解りやすく教えたと思うんだけど…」
さすがに刺激は強すぎたか…？テロ活動をしている奴がまたも仲間の
仇討ちの為ごときに自分等の命を利用したのだから…
…と…そう思われたが

「じゃっ…じゃあ新羅さんは人殺しとかそんなんじゃなくそのテロ
活動している琲瑠袈って組織の人間を潰そうとしましたが、琲瑠袈
は表舞台には名が出ておらずさらには庶民という設定で表で生き
てきたから

「連続庶民殺人事件」なんて変な事件で呼び名されてしまい挙げ句
新羅さんがまるで犯人扱いになってしまったと…そういうことです
か？」

「えっ…ええまあ…。」

「良かったあー。新羅さんが本当に人殺しじゃなくて…!!」 自分
の胸に手を当てると、ふうーと息をつく。

「そうアル!! 新羅は罪のない人間を斬るような馬鹿な女じゃない
ネ!!!!」

新羅の顔を見ると華のある笑顔を新羅に向けた。

新羅は啞然とした顔で三人の顔を見る。

(なんで……？普通こんなこと言われたら誰だって…)

「誰だって落ち込むはず…！なんて思うんじゃないよ…。」

「……！」

「こいつらはそんなもんで心曲げたり落ち込む程大層な奴らじゃねえ……。」

新羅の思いを悟るように先に銀時はパフエに夢中になりながらも言う。

「そう……。確かに…。」

「そう言われてみればそうかもしれない……。」「何やらがみがみがみと小さい子供のように言い争う二人を見て、微笑んでいると、銀時は何かを思い出したらしく新羅の顔を直視する。

「連沢！だったら

なんでてめえは組織内部の人間だけじゃなく表舞台で瑋瑠袈に依頼した人間まで手に掛けている！」

「……！」争い事をやめ、新羅に顔を向ける神楽と新八。

「ピンポン！」

実はそこが今回重要な役割を持つローゼンメイデンが出てくるんよ

「！」

ピースを作り、ウインクをバチッ☆と決めるとピースを作った右手でフォークを持ち皿の上に盛ってあるスパゲティをフォークに360巻き回しそれを口にパクツと入れる。

「……まず手始めにローゼンメイデンとは何か…？」

まあ

ローゼンメイデンってのは要するに

人間じゃない…。」

「……」

人間じゃない…？

………！

えっ…待っままま……ちよっ！」

「簡潔に言えば

ローゼンメイデンってのは実は

・

人形なのよ…」

「はいっ？」

「まあさつき翠羽に邪魔されたから言うタイミング削がれたけど私の後ろにいる

翠羽と蒼琉 ……

ローゼンメイデン
なものなんで……

正確に言えば
ローゼンメイデン
第3ドール 翠星石
と

ローゼンメイデン
第4ドール 蒼星石

これがこの娘達の
本当の名…！

二人ともこの場で自己紹介を…」

「…私が真選組四番隊副隊長

奥平 翠羽

んで

ローゼンメイデン

第3ドールの 翠星石 ですう…」

「そして僕が翠羽の妹

奥平 蒼琉 また

ローゼンメイデン

第4ドール 蒼星石

よろしく…」

「自己紹介は自己紹介だけど…」

さすがに…

テーブルの上での自己紹介は無いでしょ…」

女の涙に男は弱い P a r t 2（後書き）

早めじゃないけど、自分では早めに更新した感じがする W W

そういえばいつのまにお気に入り登録が増えてた！

どうもありがとうございます∩・ω・∩）

お気に入り登録や感想等お待ちしております W W

人形には感情ってもんがある!?!?じゃあ髪が伸びる人形って…

「にっ にに! …… に

人形! ……! ……! ……」

三人は目を丸くする。

「ええ …… 正真正銘

人形よ…

でもこんなことで驚いていたんじゃ話進まないから質問は後で受け付けるわ…

さっきの続…」

「おいおい…ちょっと待てよ…人形なんて言っただけ脅してるつもりなのか知らねえが…そいつらが人形だって証明出来ることあんのか…?」

「本拠ならあるけど…

翠羽・蒼琉腕を……。」

何を言い出すかと思えば、腕などとはざきだす新羅の顔を嘲笑うかのように見下す銀時。

翠羽は制服の袖を

蒼琉は着物の袖を

「あまり見せたくはなかったですけど…」 嫌々ながら捲る。

「よく目を擦って見てみなさいよ。この娘達が人形だって証拠をね……」

「!!!!!!」

「これ……………!!」

わざわざ目を擦らんでも一目見ればわかる。

翠羽と蒼琉の肱は普通の人間とは異なる肱をしていた。人間の肱は関節というものがありそれがあるからこそ自由に腕を動かすことが出来る。だが翠羽達の腕は球体関節。普通の人間では有り得ない。

「見ての通り。私達人間とは違う腕をしてるでしょ？他にもこの娘達の膝とかも人間とは違う形をしている……」

「ごめんなさいね二人とも……。わざわざ。」

「大丈夫です……。」翠羽は一言申し……

蒼琉は無言のまま縁を戻す。

「脅してるつもりなんてサラサラないわよ……ただ私は本当の事を話しただけ……本拠まで根拠だってあるのだから信じてくれるわよね？」

「……。」

無論返す言葉がない。

「それじゃあ……さっきの続きといきましょうか……」

ローゼンメイデンってのはさっきも言ったとおり人形……

だけどこの娘達が今

こうやって生きていけるのは 人間がこの娘達の首の裏にある鍵

穴にローゼンメイデンを目覚めさせる専用の鍵を入れ卷いたから。

それは

のちの“契約”に繋がる」

」

「契約――？」

「そう：契約とはローゼンメイデンとその人間がローゼンメイデンが嵌めている薔薇の指輪に

キスをすることで契約は成立する。契約をした者をローゼンメイデンの中では

ミーディアム
契約者

と呼ぶ。

契約をすればその人間とローゼンメイデンは薔薇の契約を結ぶこととなる：だけど結べばそれ以上に代償というものも持つこととなる。ローゼンメイデンは契約をすればより強力な力を得る。その得る力の原力は元は契約を結んだ人間の力。ローゼンメイデンが力を使えば契約した人間の力は消耗する。より強い力を使えばその人間は：死へのカウントダウンが始まる。」

「力を使うったって：普段こいつらそんな戦争みてえなことすることでもあんのか？」「そう……言い忘れてたわ。

これは：ローゼンメイデンにとって一番大事なこと……」

「大事……？」「ええ：ローゼンメイデンにはね：使命があるの。

その使命って言うのは

アリスを目指すこと」

「アリス…？んだそれ…？」

「アリス…どんな人形の中でも気高くてどんな人形よりも美しくて一点の汚れがない。そのアリスは必ずしも人形の中では有り得る存在…：…だけどそのアリスになれなかった人形

それがローゼンメイデン」

「！…！！！」

「ローゼンメイデンは

第一ドールから第七ドールまでいて皆それは姉妹。皆それぞれ仲の良い姉妹…。

だけどローゼンメイデンに与えられた使命…それは…

姉妹同士で戦い

一人生き残った人形がアリスとなること…

それが“アリスゲーム”」

「！…：…アリスゲーム！？」

「アリスゲームの勝者こそが本当のアリスになれる」

「だが…：…何の為に…！！」

アリスになる…！！アリスになって何になるんだ！」

「それは……」

「お父様に会うことです…」

「翠羽！」

新羅が言いかけた時に翠羽は自ら口を開く。

「私達を造った人の顔は

姉妹全員誰も覚えてないです…。ただわかるのは

“お父様”という名前だけ。アリスになれば…お父様に会えるです。

だけど…確かに…!!

お父様に会いたいですけど！そんなのはおかしいです！仲の良い姉妹で戦うなんて…ましてや蒼星…蒼琉と戦うなんて絶対できないです！！だから…私達はアリスゲームをしないで…お父様に会う方法を考えてるです！

でも…私達以外のドールは目覚めてるのか…誰と契約をしているのか！ 他のドール達が私達の

知らない場所でアリスゲームを始めているかもしれない……

それもわからない…

もう私は……嫌なんです！！姉妹が…戦う姿を見るのは！

「お前等…姉妹で戦ったことあるのか…？」

「……一度だけ…ですう。七体全員で…

でも結果…決着は尽かず、私達はある馬鹿ウサギにより…そこで深い眠りに
つきました…。

気付いた時にはもう40年の時が過ぎていたです。

姉妹同士が会うなんて滅多にないこと…

私と蒼琉が今こうして会えたのは、本当に偶然に過ぎないですう…。

ですが…偶然にも

この街でもう一人のローゼンメイデン…私達の姉妹に会いました。

第六ドール雛苺^{ひないちい}に出会いました。

腕はもぎ取られ

顔半分 輝が入って

片方の脚が無…い状態で

惨い様で

この歌舞伎町の

ゴミ捨て場で

40年ぶりの再会を果たしました…」

人形には感情ってもんがある！？じゃあ髪が伸びる人形って…（後書き）

ローゼンメイデンファンの皆さん！深くお詫び申し上げます！

私自身の勝手な想像を広げた挙げ句、雛苺を…あんな惨い姿で出番に出してしまいました。

前々からローゼンメイデンキャラ崩壊していますが　そういうところは

スルーでよろしく願います！！

＊感想・お気に入り登録よろしく願いますww

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4957x/>

薔薇獄少女

2011年11月28日01時47分発行